

# 恵下遺跡発掘調査概報

1980

広島県教育委員会  
(財)広島県埋蔵文化財調査センター

恵下遺跡発掘調査概報 正誤表

頁	行	誤	正
(序)	5	規削工事	掘削工事
々	10	発掘調査	発掘調査
々	18	発掘調査	発掘調査
(例言)	(3)	IV 2・3	IV - 2・3
々	(4)	行ない	行い
4	13	餘々に	徐々に
8	14	100m	100cm
11	1	崩	角
12	3	第1石目	1石目
15	6	ありし、	あり、
25	12	各調査を	各調査区を
32	14	疾む	挾む
々	19	0.8	0.8m
42	16	座棺	座位崩葬
々	25	型	規矩
43	11	緩傾斜	緩傾斜
45	29	型	形
46	6	古瀬清秀氏の分類	古瀬清秀氏の分類 <sup>ii</sup>
々	13	堅穴式石室	堅穴式石室
々	註(1)	潮見浩「広島市牛田早福 田山遺跡の発掘調査報告」 『広島考古研究』21960	潮見浩「山陽地方における 弥生時代墓制—広島県 発見の3例を中心として —」『古代学』第8巻第2 号、1959
47	12	四隅突出前方後方型墓	四隅突出型前方後方形墓
48	文獻①	福山史	福山市史
々	⑫	高陽新住宅街地	高陽新住宅市街地
々	⑬	河瀬正則	河瀬正利
々	※	※ この他に	追記 この他に

## 序

広島県の中核管理都市である広島市は、昭和30年代後半からの人口集中化により中心市街地からその近郊へと宅地造成の波が広がり、すでに沖積デルタから周辺の丘陵地帯は言うにおよばず、山間部の谷あいにまで宅地化が進んでおります。

ここ、広島市安佐町飯室の一帯も、これまでのおだやかな山村の風情から一変して中国自動車道の堀削工事が急ピッチで進み、その喧噪が谷あいにこだましており、最近の開発事業のすさまじさを眼前に見る思いであります。

このたび、当センターが調査を実施した恵下遺跡も、そういった都市化の波をかぶりはじめた地域の一つであり、株式会社フジタ工業が宅地や工場用地の造成を計画している地域であります。

この遺跡は、昭和52年度に山城の発堀調査を実施中に新たに発見された弥生時代から古墳時代にかけての土塙墓群であります。これまで、この周辺地域では先人の足跡を示す知見は少なく、今回の調査によってはじめて、その活動の一端が明らかにされました。したがって、この遺跡のもつ学術的価値は高く、この周辺地域の古代史研究に欠かせぬ資料といえましょう。

さて、ここにその成果を発表するはこびとなりました。短期間にまとめた小冊子ではありますが、本概報が今後の研究の一助になればこれにすぐる喜びはありません。

なお、発堀調査にあたって、遺構の拡大等に伴なう数々の困難な問題に対し、深いご理解と多くのご協力を惜しまれなかつた株式会社フジタ工業に対し深甚なる敬意と謝意を表するものであります。

昭和55年3月

財団法人広島県埋蔵文化財調査センター

事務局長 西 本 省 三

## 例　　言

1. この概報は、昭和54年11月5日から昭和55年1月8日にかけて実施した森城  
団地（広島市安佐町飯室）造成事業に係る埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は広島県教育委員会がフジタ工業株式会社から委託を受け財団法人  
広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
3. 本書は、植田千佳穂（I, III, IV-1, V），青山透（II, IV 2・3）が分担  
して執筆し、編集は植田・青山が協力して行った。
4. 図面の製図は植田、青山が行ない、写真は遺構を植田が、遺物を中田昭が撮  
影した。
5. 玉類の石材同定は広島県教育委員会指導課福原悦満氏、出土土地名表作成に  
当たっては広島大学考古学研究室の御教示を得た。記して謝意を表したい。
6. 本報告の挿図に使用した遺構表示記号は次のとおりである。

D：土塚， S：箱式石棺， M：溝状遺構

7. 「第1図に使用した地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の  
5万分の1地形図を複製したものである。（承認番号）昭55中複、第11号」

## 目 次

I はじめに	(1)
II 位置と環境	(2)
III 調査の概要	(6)
IV 遺構と遺物	(8)
1. A調査区	(8)
2. B調査区	(23)
3. C調査区	(28)
V まとめ	(41)

## 挿 図 目 次

第1図 恵下遺跡周辺遺跡分布図	(3)	第15図 B調査区遺構配置図	(24)
第2図 恵下遺跡周辺地形図	(5)	第16図 B調査区D27~30実測図	(26)
第3図 A調査区土層図	(6)	第17図 B調査区D31~34実測図	(27)
第4図 恵下遺跡調査区配置図	(7)	第18図 C調査区遺構配置図	(29)
第5図 A調査区遺構配置図	(9)	第19図 C調査区実測図	(31)
第6図 A調査区実測図	(折込)	第20図 C調査区S4出土鉄器実測図	(33)
第7図 A調査区D16出土玉類実測図	(14)	第21図 C調査区D35~38実測図	(35)
第8図 A調査区D1~4実測図	(16)	第22図 C調査区D39~45実測図	(36)
第9図 A調査区D5~8実測図	(17)	第23図 C調査区D46~49実測図	(37)
第10図 A調査区D9~12実測図	(18)	第24図 C調査区D50~52・54実測図	(38)
第11図 A調査区D13~16実測図	(19)	第25図 C調査区D53・55~58実測図	(39)
第12図 A調査区D17~22実測図	(20)	第26図 C調査区S3・4実測図	(40)
第13図 A調査区D23~26・59実測図	(21)	第27図 各調査区出土土器実測図	(41)
第14図 A調査区S1・2実測図	(22)		

## 図版目次

図版 1 a	恵下遺跡遠景	図版 14 a	B調査区 D31・32
b	同上	b	同上 D34
図版 2 a	A調査区全景発掘開始時	図版 15 a	C調査区発掘開始前
b	同上完掘後	b	同上遺構検出状態
図版 3 a	A調査区全景完掘後	図版 16 a	C調査区 M4・5, S3・4
b	同上 D1~4, 第6郭土壁	b	同上
図版 4 a	A調査区 D5~10, S1	図版 17 a	C調査区 S3
b	同上 D9~19	b	同上
図版 5 a	A調査区 D11~12	図版 18 a	C調査区 S4
b	同上 D12	b	同上及び鉢出土状況
図版 6 a	A調査区 D16	図版 19 a	C調査区 D35~58
b	同上玉類出土状況	b	同上 D35~45・47・48
図版 7 a	A調査区 D17~20	図版 20 a	C調査区 C35検出状態
b	同上 D19~26, S2	b	同上 M6, D35~37
図版 8 a	A調査区 D21・22・25, S1	図版 21 a	C調査区 D35~39
b	同上 D22・24	b	同上 D38
図版 9 a	A調査区 S1	図版 22 a	C調査区 D35・38~42
b	同上	b	同上 D41・42
図版 10 a	A調査区 S2	図版 23 a	C調査区 M7, D46~58
b	同上	b	同上 D50~58
図版 11 a	B調査区発掘開始前	図版 24 a	C調査区 D51・52
b	同上完掘後	b	発掘風景
図版 12 a	B調査区 D27・28	図版 25	出土遺物 (1)
b	同上 M3, D30~34検出状態	図版 26	出土遺物 (2)
図版 13 a	B調査区 D31~34		
b	同上 M3, D30~34		

## 図表目次

第 1 表	A調査区土壟計測表………(10)	第 4 表	各調査区土壟規模主軸一覧………(43)
第 2 表	B調査区土壟計測表………(25)	第 5 表	広島県内鉢出土土地名表………(47)
第 3 表	C調査区土壟計測表………(30)		

## I は じ め に

昭和52年12月、広島県教育委員会は、株式会社フジタ工業の住宅団地および工場用地造成に伴って広島市安佐町飯室字森城において中世山城である恵下城跡の発掘調査を実施した。この結果、郭6、堀切り2、たて堀、掘立柱建物跡等の遺構が確認され、多くの知見を得た。ところが、発掘調査終了直前に第6郭に設定した第2トレンチから土星等、中世遺構とともに古墳時代前期の土塙10数基が確認され、その密度や周辺地形の状況から判断して、さらに多数の遺構が存在することが推定された。このため、県教育委員会は株式会社フジタ工業とこの遺跡の取り扱いについて協議を行い、これらの新たに検出もしくは予想される遺構群については別途調査を実施することとした。

今回の調査は、以上の経過をふまえたものであり、昭和55年春の工事着工をひかえ、広島県埋蔵文化財調査センターが昭和54年11月5日から調査を開始した。しかし、調査の進行につれて予想以上の土塙墓群が検出されたため、再度、フジタ工業と協議を行い発掘調査費用の増額および期間の延長等について理解と協力を求め、調査員や作業員の増員を行い昭和55年1月8日、現地調査を終了した。

これらの遺構群の内容については以下に述べる通りであるが、当地域周辺はこれまで本格的な調査が行われておらず、遺物の単独出土が知られているにすぎなかった。その意味で今回まとまって検出された土塙墓群は、今後の調査・研究に格好の資料を提供したものといえよう。

なお、発掘調査の実施にあたり、株式会社フジタ工業広島事業部朝村守幸、大川猛太郎両氏にはひとかたならぬ御協力をいただいた。記して謝意を表したい。

### 註

- (1) 広島県教育委員会「恵下城跡発掘調査概報」 1978

## II 位置と環境

恵下遺跡は、広島市安佐町飯室字森城3333番地外に所在する。

本遺跡の西側を流れる鈴張川は、遺跡の北方海見山に端を発し小河川を集め南流し狭小な沖積地を形成しながら安佐町宇津にて本流太田川に合流する。

本遺跡はこの鈴張川の支流にあたる二本の小河川によって挟まれた、堂床山より西に延びる丘陵尾根上先端部に形成された弥生時代後期～古墳時代初頭にわたる土塙墓群である。遺跡の位置する尾根は、標高170～180m前後で南方眼下の狭長な平野部との比高差は約50mである。

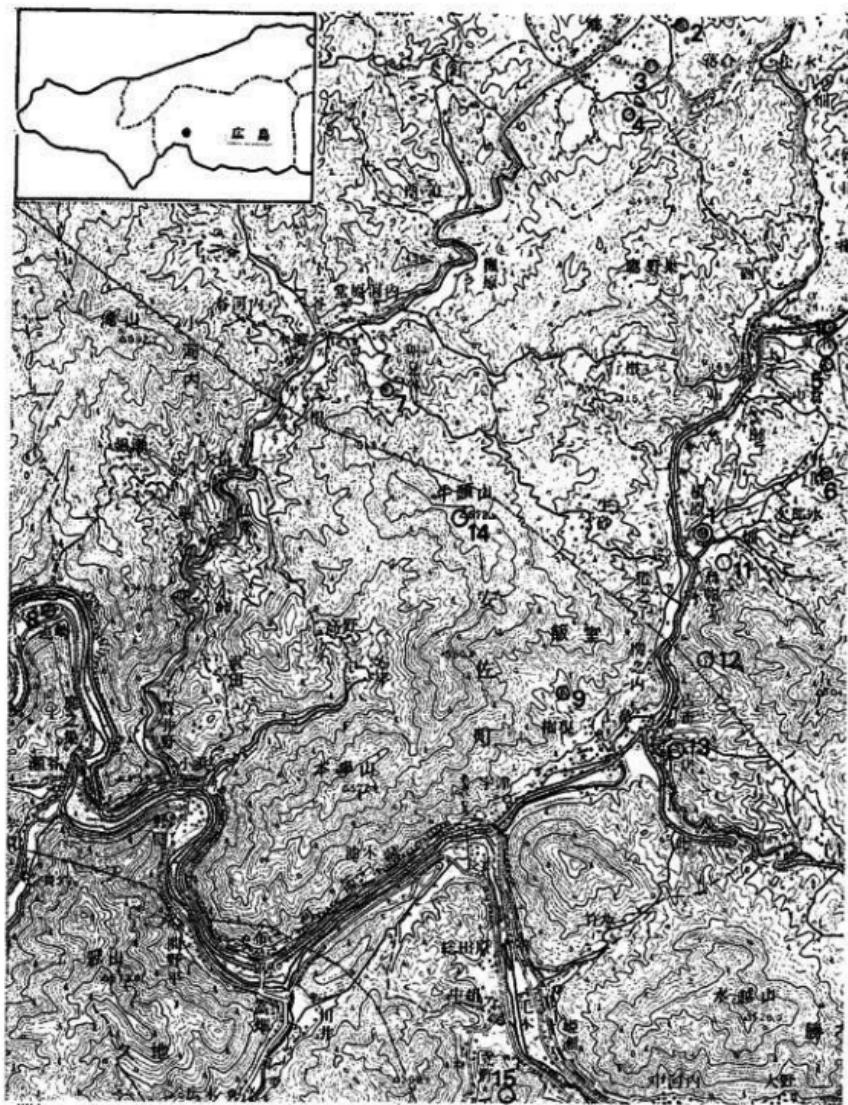
鈴張川流域の原始古代の遺跡は、福谷昭二氏や県立可部高等学校史学部などの分布調査でその成果が上げられている。

先土器時代の遺跡、遺物等は当地域では未確認の状態であり、縄文時代の遺跡、遺物は石斧単独出土地として鈴張川上流の東殿城付近で採集された磨製石斧と、鈴張川と水源を同じくし牛頭山を挟んで南流し太田川に注ぐ小河内川の中流域に位置する明見谷付近出土の磨製石斧が知られている。両者は遺構から遊離した状態での発見例ではあるが、当地域の縄文時代の生活を知る数少ない遺物である。

弥生時代の遺物は鈴張川流域において、今回調査の恵下遺跡の他明確にされていないが、本遺跡の北方野原遺跡で土器の散布がみられる。また本遺跡南西2kmの飯室上島では、標高180mの丘陵斜面で弥生時代後期の變形土器が採集されている。

小河内川流域では、<sup>④</sup>上流の山遺跡があり、<sup>⑤</sup>壺の底部が出土している。また山遺跡の南方の谷筋で弥生式土器の散布地として前沢遺跡がある。両者は土器の出土量も微量であり全容は把握できていない。また太田川中流域に所在する追崎遺跡は、<sup>⑥</sup>太田川が蛇行し大きく流路を変える氾濫原に沖積された平坦地に位置する。遺跡は偶然発見されたもので、弥生時代中期～後期の甕、壺、鉢型土器の他、大型蛤刃石斧、砾石、刃器、石錐、土製投弾等が出土している。これらの中で中期後半の變形土器は所謂塙町式併行期に当たるものである。<sup>⑦</sup>なお本遺跡では中世～近世の人面土製品が出土している。このように当地域の弥生時代の考古学的資料は少なく、断片的なものである。

古墳時代の遺跡は小河内川上流の扇手古墳のみで、この古墳は小河内川に西面する標高350m前後の丘陵斜面に位置する。内部主体は箱式石棺であり、棺内より人骨が



第1図 恵下遺跡周辺遺跡分布図 (1 : 50000)

1. 恵下遺跡及び恵下城跡
2. 山遺跡
3. 前沢遺跡
4. 眉手古墳
5. 石井出土地(鈴張)
6. 野原遺跡
7. 石井出土地(小河内)
8. 追崎遺跡
9. 弥生土器出土地(上島)
10. 東殿城跡
11. 烟城跡
12. 市場城跡
13. 土居城跡
14. 牛頭城跡
15. 毛木古城跡

出土している。

この他、当地域の隣接する地域では前期古墳、後期古墳及び群集墳が認められるが、当安佐町域では現段階において未確認であり、古墳分布状態は空白となっている。しかし本遺跡で箱式石棺の存在が明らかになり、当地域の墳墓のあり方を示唆する一方古墳の存在の可能性を示すものである。

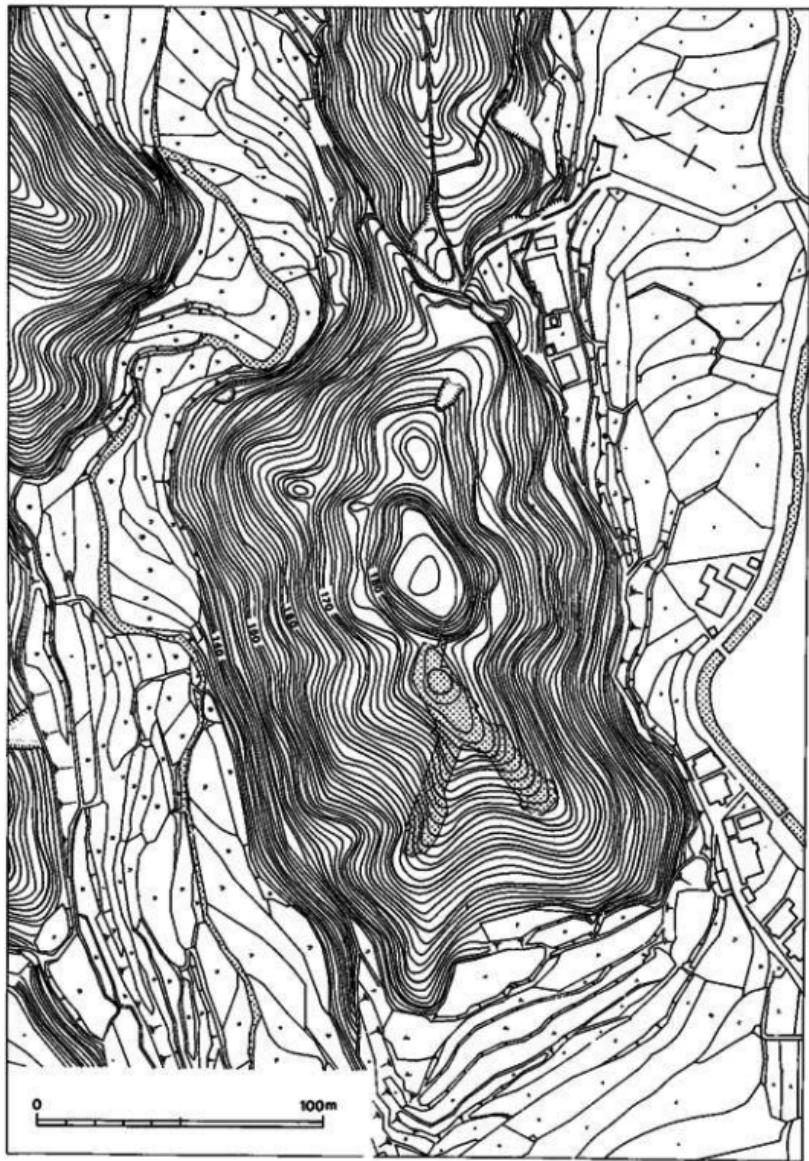
歴史時代の遺跡、遺物は、恵下城跡本丸南端部より8世紀を前後する須恵器の环蓋片(1)が出土しているにすぎなく詳細は不明である。

中世では鈴張川に沿って中世山城が数多く築かれ、南北朝～戦国時代に順次築城されたもので、古くより交通の要衝として重要視されたことが知られる。

このように本遺跡の周辺部については遺跡・遺物から原始・古代の様相をつかむことは困難であるが、近年中国縦貫自動車道建設に伴なう発掘調査をはじめとして山間部の遺跡の発見例も増加し、社会的基盤、生産基盤を通じての山間地域の遺跡のあり方が徐々に解明されつつあり、当地域周辺についても今後その実態が明らかになることが期待される。

#### 註

- (1) 福谷昭二「安佐町のあけぼの」安佐町史第2章1977 広島市
- (2) 広島県遺跡台帳による。山県郡豊平町大字今吉田字山
- (3) 同 上 山県郡豊平町大字今吉田字前沢
- (4) (註)(1)に同じ。
- (5) 福谷昭二氏御教示による。
- (6) (註)(2)に同じ。
- (7) 広島県教育委員会「恵下城跡発掘調査概報」1978



第2図 恵下遺跡周辺地形図（1：2000 アミメは調査区）

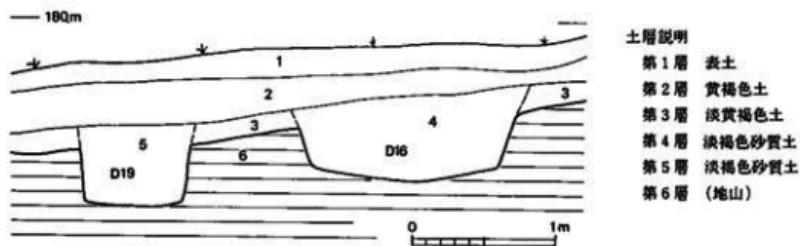
### III 調査の概要

恵下城跡の第1郭（標高188.4m）より南西に伸びた丘陵尾根は第6郭をすぎたところから南尾根と西尾根に別れて下っている。恵下遺跡の範囲は北尾根（第6郭周辺）・南尾根・西尾根を合わせた南北約70m、東西約56mである。昭和52年の発掘によって中世山城跡関係の遺構はすべて調査を終了しており、今回は土塙群の調査に専念した。

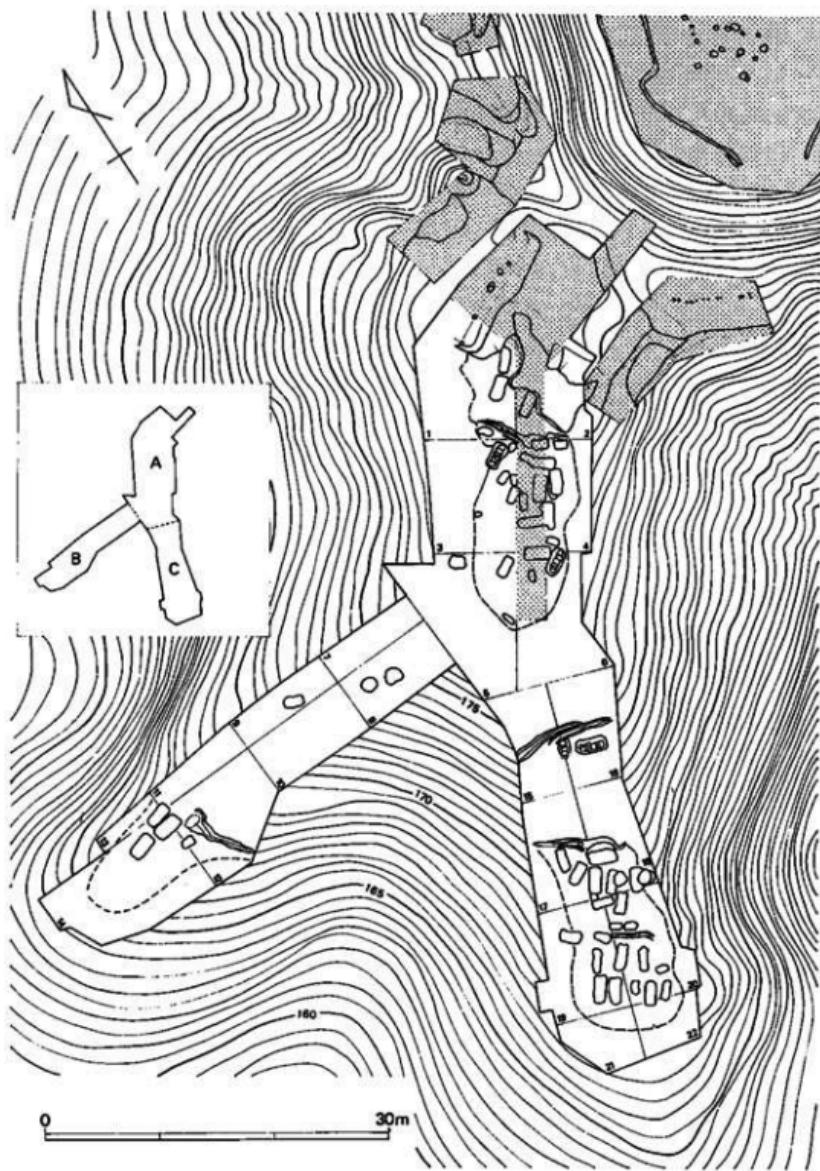
北尾根は前回の試掘調査によって多数の土塙が検出されており、南尾根と西尾根にも斜面に続くテラス状の平坦面が存在し、土塙群が予想されていた。これらのことから、調査区の設定は地形に合わせて尾根線上にY字状の基線を設け、これを10mごとに区切って1～22区まで設定した。作業の手順から便宜上、1～6区をA調査区、7～14区をB調査区、15～22区をC調査区としてA→C→Bの順に調査を行った。

まずA調査区は尾根の全面排土、遺構検出を行った結果、南北25m、東西8mの細長い平坦面に土塙27・箱式石棺2・溝状遺構・段状遺構を確認した。B・C調査区も幅2mのトレンチを尾根線中央に設定し、排土を行った結果、いたる所から遺構を検出した。この為、尾根の全面発掘に切り換え、B調査区では斜面より土塙3と平坦面より土塙5、溝状遺構を、C調査区では斜面より溝を伴なう箱式石棺2と南北17m、東西8mの平坦面より土塙24、溝状遺構、段状遺構を確認した。

調査地区の基本層序は上から表土（約20cm）、黄褐色土（約30cm）、淡黄褐色土（約12cm）、地山（花崗岩の岩盤）である。ほとんどの土塙は淡黄褐色土の上面を切り込んで構築されており、土塙内の埋没土は淡褐色～褐色砂質土である。切り合った土塙の新旧関係は埋没土の色調等が明確でなく判別しがたい。発掘面積は約1200m<sup>2</sup>である。



第3図 A調査区土層図 (1:40)



第4図 忠下遺跡調査区配置図 (1:500 アミノは昭和52年度の調査)

## IV 遺構と遺物

調査区全体で、土塙57基、箱式石棺4基、溝状遺構7等を確認し、土器、玉類、鉄器等を検出した。以下、調査区ごとに、墳墓の形態、構造及び墓域の立地、出土遺物等について述べていくことにする。

### 1. A調査区（第5・6図）

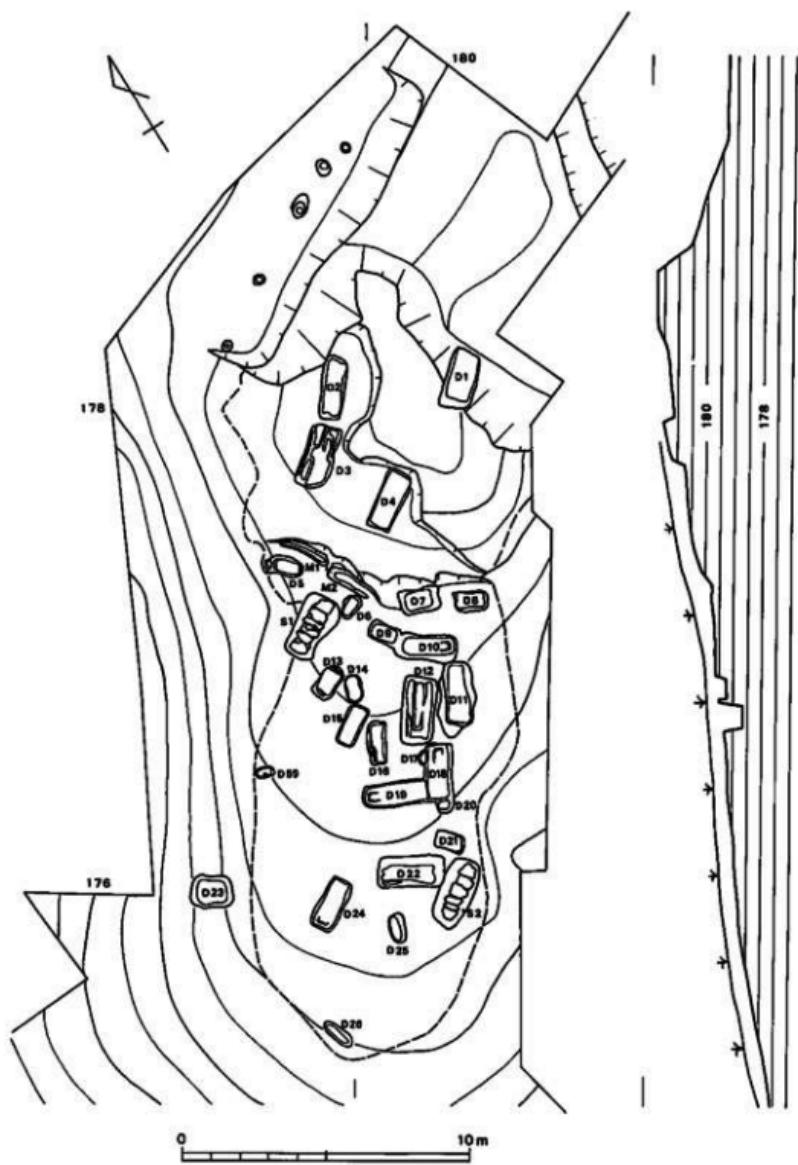
A調査区は恵下遺跡の最高所にあたり、標高177～181mである。北半には恵下城跡の第6郭の遺構があり、この土塙より南西に長さ約25m、幅約8mの緩傾斜（比高差3m）が続き、土塙27基、箱式石棺2基等が密集している。墓域はD7・8の北側を、北東から南西に伸びた尾根線に直交する状態で、30～40cm削平し、区画している。墓域の平坦面は長さ約13m、幅約5mである。北西側はM2の溝によって切られてい る。

#### 土塙（第8～13図）

土塙は規模・構造等によってI類、II類・III類（a・b）・その他に分類できる。I類は組み合せ式木棺を埋置したと思われる隅丸長方形プランの大形土塙で、底面は長さ200cm、幅80cm、深さ100cmほどの規模である。II類はI類同様、木棺を埋置したと思われる隅丸長方形プランの中形土塙で、底面は長さ130cm、幅50cm、深さ60cmほどの規模である。III類は小形の土塙で、A調査区では平面プランに比べ、深いもの（a）と浅いもの（b）に分類できた。aは長さ80～95cm、幅50～55cm、深さ100cmほどの規模で、木棺を埋置したと思われる。bは長さ80cm、幅40cm、深さ40cmほどの規模である。

I類はD1～4・10～12・18・22・24の10基がある。D12は墳墓群のほぼ中央に位置し、掘り方上面では隅丸長方形プラン、床面では匁状を呈し、底面中央を長さ150cm、幅36cm、深さ5cmで掘り下げている。北東を頭位とした側板が小口板を挟む形の木棺が埋置されていたものと思われる。側板を差し込んだ溝はD19・24にみられ、底面中央の掘り下げは部分的ではあるが、D10・18・19・24にもみられる。

II類はD15・16の2基がある。D16は底面を匁状に掘り込み、南半では側板を差し込んだと思われる溝がある。北半より勾玉1点、管玉4点、ほぼ中央よりガラス小玉



第5図 A調査区造構配図 (1:200)

1点がいずれも底面より約5cm上で出土した。

III類aはD5・7・8・13・21・25の6基がある。このうちD5・13・25とD7・8・21の2つのタイプに類別される。前者は底面の長さ80cm、幅50cm、深さ100cmの規模でやや楕円形気味のプランである。D5は掘り方上面のプランが楕円形に近いが、底面では長方形を呈し、断面は袋状である。また、D5に伴って溝があり、長さ180cm、幅30cm、深さ25cmで弧状を呈す。D16も同様な土塙で、両小口部に溝がみられる。両側板が小口板を挟む木棺が埋置されていたと思われる。後者は底面の長さ

第1表 A調査区土塙計測表

土塙番号	平面プラン	掘り方上面 (長さ×幅)	底面 (長さ×幅)	深さ	主軸方向	尾根基部	備考
D 1	隅丸長方形	(200)×110	(170)×88	85	N50°E	平行	東半を欠失
D 2	隅丸長方形	215×78	190×64	75	N40°E	平行	
D 3	隅丸長方形	220×105	218×75	82	N55°E	平行	側板側に溝あり。壁面90°傾斜
D 4	隅丸長方形	210×88	197×76	42	N56°E	平行	底面水平
D 5	楕円形	114×67	83×53	110	N43.5°W	直交	断面は袋状。
D 6	楕円形	88×50	70×33	53	N63°E	平行	
D 7	長方形	135×77	91×60	108	N68.5°W	直交	壁面80°傾斜。
D 8	長方形	113×65	96×51	80	N53°W	直交	壁面85°傾斜。底面水平。
D 9	隅丸長方形	(110)×63	(85)×52	84	N31.5°W	直交	D10と重複。D10との境直上に変形土器。
D 10	隅丸長方形	216×90	177×62	88	N60°W	直交	底面中央に掘り下げ部あり。
D 11	隅丸長方形	225×100	200×65	85	N30°E	平行	やや部分的に崩れている。
D 12	隅丸長方形	237×114	190×80	90	N36°E	平行	底面中央に掘り下げ部あり。
D 13	隅丸長方形	124×67	102×57	97	N67°E	平行	小口溝あり。壁面90°傾斜。
D 14	長楕円形	99×56	87×45	32	N20.5°E	平行	
D 15	隅丸長方形	150×70	135×56	82	N56.5°E	平行	壁面85°傾斜。底面水平。
D 16	隅丸長方形	147×63	130×42	42	N28.5°E	平行	玉類出土。
D 17	隅丸長方形	(27)×50	(22)×40	22	N62°W	直交	
D 18	隅丸長方形	200×95	188×72	60	N29°E	平行	D17・D19・D20と重複。底面中央に掘り下げ部あり。
D 19	隅丸長方形	(224)×80	(215)×75	50	N66°W	直交	底面中央に掘り下げ部あり。
D 20	隅丸長方形	(43)×55	(30)×38	30	N25°E	平行	
D 21	長方形	103×57	99×55	70	N41°W	直交	壁面90°傾斜。
D 22	隅丸長方形	233×108	185×53	60	N59°W	直交	S2と重複。壁面70°傾斜。
D 23	不整長方形	143×105	99×75	70	N61°W	直交	底面は傾斜。
D 24	隅丸長方形	182×81	169×63	61	N63°E	平行	底面中央部に掘り下げ部あり。
D 25	長楕円形	99×53	84×30	64	N16.5°E	平行	
D 26	長楕円形	120×43	94×19	25	N20°W	直交	
D 59	長楕円形	61×35	50×26	25	N65.5°W	直交	炭・焼石を含む。

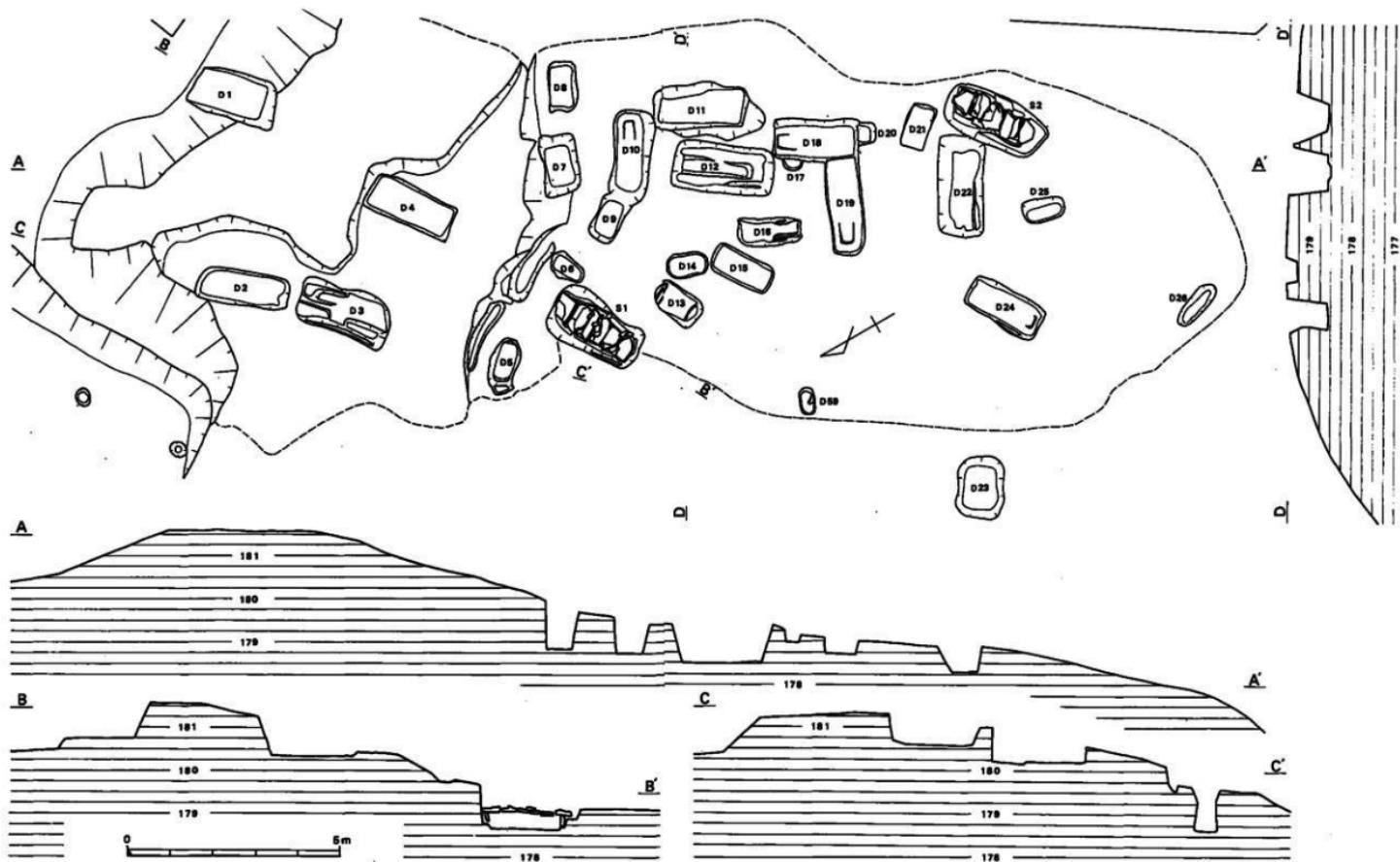
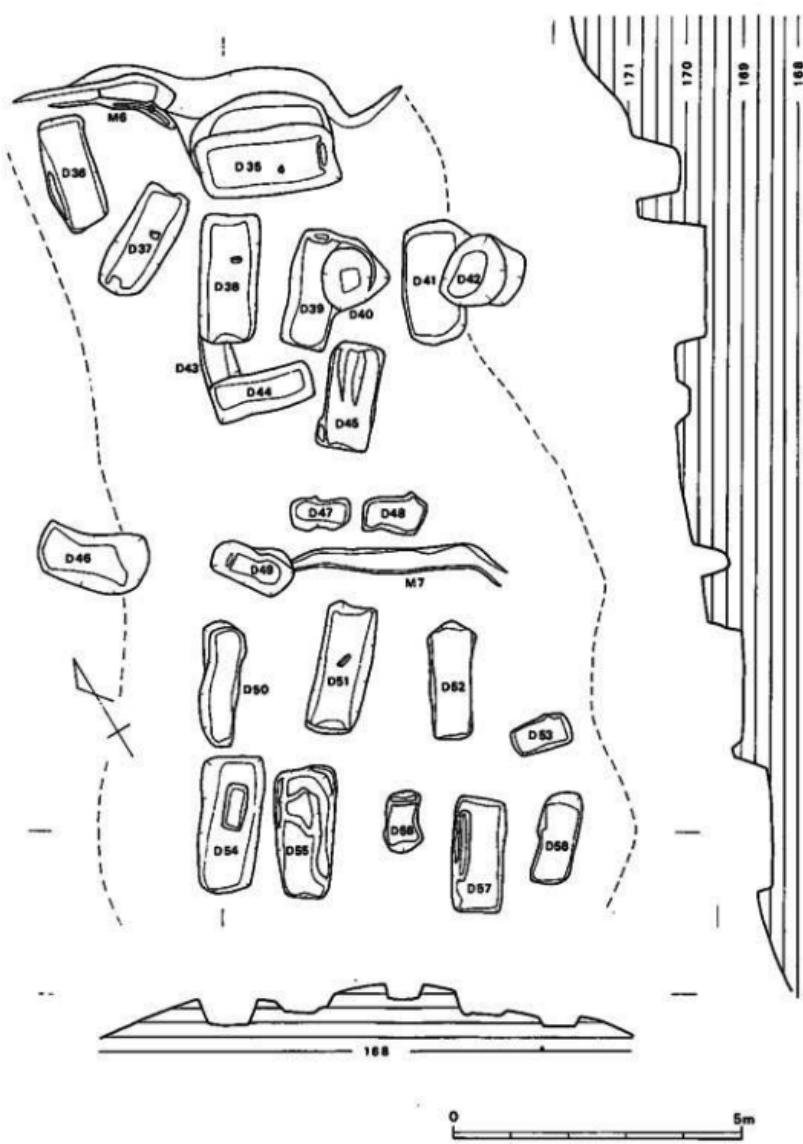


图 6 国 A 洞穴区平面图 (1 : 100)



第19圖 C調査区実測図 (1 : 100)

### 箱式石棺・溝（第18・26図）

S 3・M 4 C調査区土塙墓群から約4m高い尾根上斜面に位置し、M 4はS 3に伴なう溝である。現長約6m、幅6m、深さ0.5mを測り断面U字状を呈しM 5によって切られている。S 3の構築にあたっては、北側はこの溝より尾根を区画するとともに高い部分を削平し、尾根が下がる南側は土を入れ平坦地をある程度つくり、S 3の墓塙を掘ったと思われる。

S 3はM 4から約80cm離れた位置に尾根に平行してある。石棺の掘り方は現長1.2m、幅1m、深さ0.2mを測り隅丸長方形を呈する。蓋石は3枚現存し南側の小口石、蓋石を欠失している。石は長さ約60cm、幅30~50cm、厚さ10~20cmの花崗岩の割り石を使用し、間隙には小礫を詰め目地としている。側石は東、西とも長さ50cm、幅30cm、厚さ15~20cmのもの3枚が現存し、底面を若干掘り凹め高さを揃えている。

石棺主軸方向はN30°Eで、棺の内法は現長1.4m、幅0.4m、深さ0.25mで北に広いことから頭位は北とみられる。小口石は掘り方に沿って若干深く掘込み据えられており、側石が小口石を狭む形態のものである。出土遺物はなく赤色顔料等の塗布もない。

S 4・M 5 C調査区尾根斜面に位置し、S 3・M 4の東に隣接する。M 5はS 4に伴なうとみられ、尾根に直交し地山を掘込んだもので現長6m、幅0.5m、深さ0.5mで断面U字形を呈する。

S 4はM 5から約90cm離れ、尾根に直交し位置する。石棺の掘り方は長さ2.6m、幅1.2m、深さ0.8を測り、不整形な隅丸長方形を呈する二重土塙である。蓋石は7枚で厚みのある細長い河原石や扁平な石を横架させている。蓋石の中央部の間隙には小石を詰めて目地としているが、粘土等は認められない。二重土塙のテラス面からの掘り方は、長さ2.2m、幅0.7m、深さ0.3mの長方形プランを呈する。側石は厚みのある40cm前後の石を掘り方壁面に接するように据え、高さを揃えるために底面を若干掘込むものがあるが詰め石で調整する箇所もある。北側5枚、南側4枚で構成される。東側の小口石は底面を深く掘込み堅固に据えられ、西側の小口石は据え置かれた状態で側石が小口石を挟む形態のものである。

石棺主軸方向はN30°Wで内法は長さ1.75m、幅0.4m、深さ0.24mを測る。赤色顔料等の塗布は認められなかったが、石棺の床面東北隅より長さ14.7cmの鉈が刃部を西小口方向に向け出土した。

## 出土遺物（第20・27図）

C調査区より土器、鉄器が出土している。遺構に伴なうものはD52上面出土の變形土器(3)、S4床面出土の鉈がある。遺構に伴なわないものはS3蓋石上面出土の變形土器(5)、C-18区表土層出土の土師質土器坏(12)、C-15区表土層出土の備前焼摺鉢(10)がある。(10)は先年恵下城跡発掘で本丸より出土したものと同一個体である。

### 土器（第27図-3・5・10・12）

(3)は變形土器で底部を欠失する。体部はよく張り頭部はくの字状に短く屈折させ、一旦壁面に強い稜線をつくり出し、更に上方にのばし端部を丸くおさめる。体部内面は主として横方向（右→左）のヘラ削り、外面はヘラナデ調整する。頭部以上は横ナデの後、口縁帯に櫛齒状工具で6条の平行沈線を加える。口縁部内面は横方向のヘラ磨きをする。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好で淡褐色を呈す。口径12.0cm。

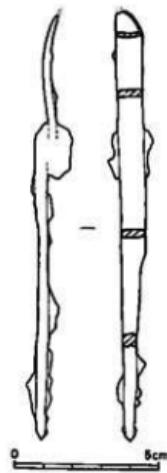
(5)は變形土器の頭部破片である。頭部はくの字状に短く屈折させ、一旦外面に強い稜線をつくり出し上方向にのばす。頭部内面下はヘラ削り、頭部以上は内外面ともナデ調整する。胎土は砂粒を含み焼成は良好で、淡褐色を呈す。

(10)は備前焼摺鉢である。内面底部はほぼ平坦で、体部は直線的に斜上方にのびる。口縁は若干内湾気味で端部は上方向に僅かに拉張させる。内面は9条を単位とした櫛齒状工具で下→上に搔き上げる。内面中央部分から底部まで磨滅が顕著で条溝もかなり磨消されている。焼成は良好で、濃灰色を呈す。口径26.9cm、器高12.7cm。

(12)は土師質土器の坏の口縁部。口縁は斜上方にのび、端部はつまみ上げて三角形状におわる。内外面とも横ナデ調整。

### 鉄器（第20図）

鉈 全長14.7cmで刃部先端を僅かに欠く。刃部は幅0.9cmを測り約15°の角度で上ぞる。刃部断面はやや中凹み状を呈し、裏面は緩い弧状を呈し裏スキは観察できない。茎部は幅0.9~0.5cmを測り、中央部で闊状を呈す段をもち次第に細身になり、茎尻は尖っておわる。茎部断面は厚さ0.28cmの矩形を呈し、中央下半の断面は両側辺からの叩き締めにより裏面は四部をつくる。木布痕は認められないが、形状より木柄に差込むものである。



第20図 C調査区  
S4出土鉄器実測  
図 (1:2)

## 小結

C調査区の土塙墓群は立地、主軸方向、規模でいくつかのまとまりをもつ。

Aグループ（D38・38・41・45）は土塙主軸N45°Eで尾根に平行し段状造構により区画されるもの。I類を主とする大型土塙。

Bグループ（D50・51・52・54・55・56・57・58）は土塙主軸N45°Eで尾根に平行しM7によって区画されるもの。I類を主とする大型土塙。

Cグループ（D47・48・49）は土塙主軸N60°WでA・Bグループの主軸に直交し、A・Bグループの墓域の接点に位置するもの。III類を主とする小型土塙。

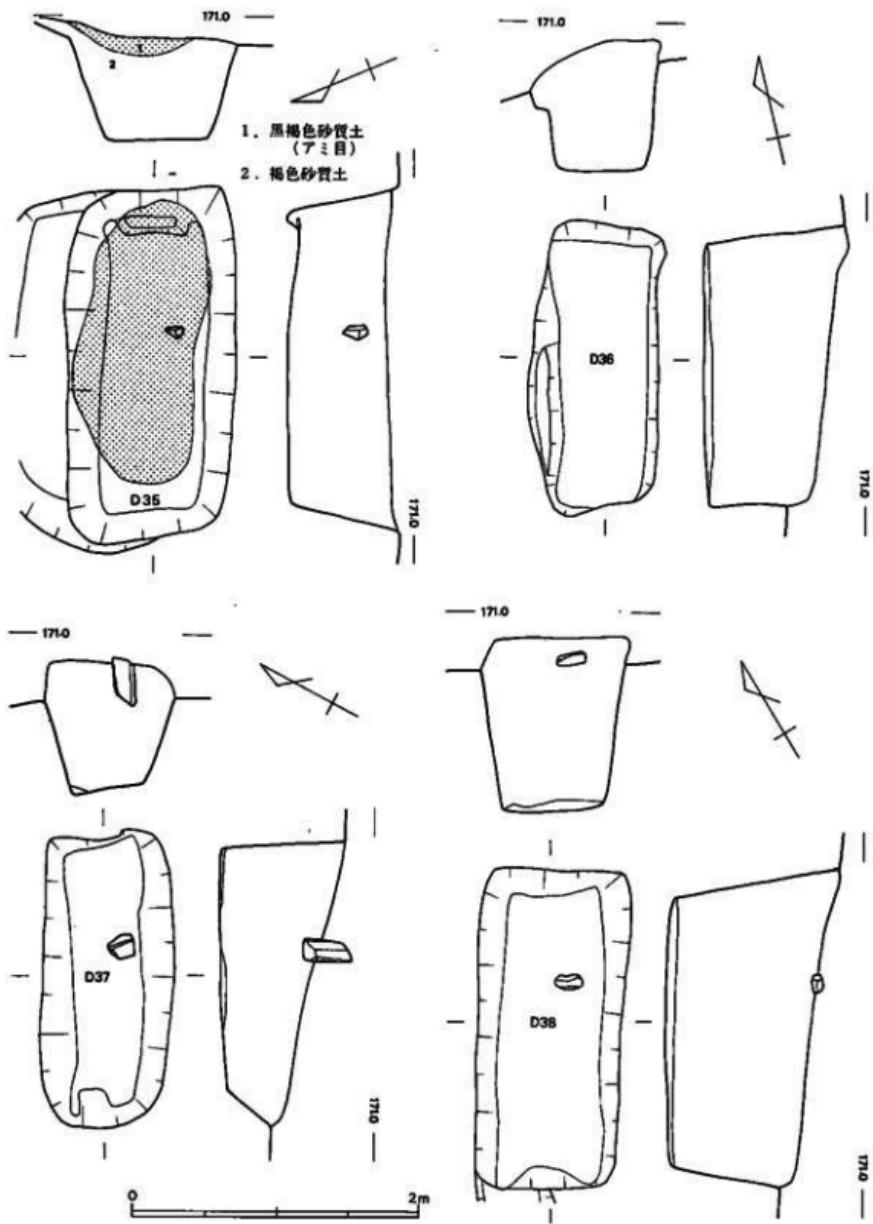
Dグループ（D35・44・53）は土塙主軸N75°Wで尾根に直交し墓域の空間を埋め散在的に位置するもの。

Eグループ（D36・43）は土塙主軸N15°Eで尾根に平行し墓域の空間を埋めるもの。その他（D37・40・42・46）は主軸方向が各グループに属さないもの（D37）。円形土塙で形態が異なり別な性格が考えられるもの（D40・42）。墓域平坦部から外れ斜面に位置するもの（D46）がある。

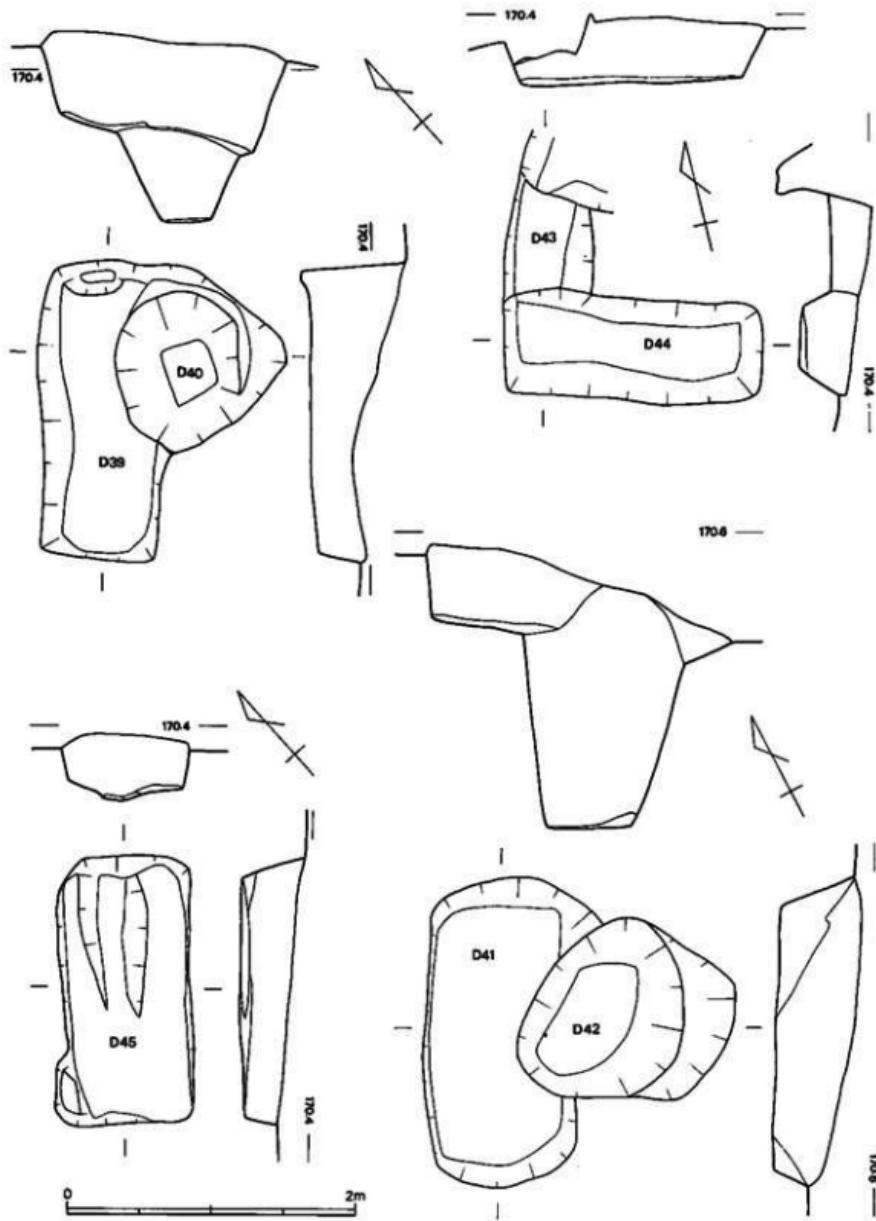
各グループの関係は、A・Bグループは主軸を同方向にもち2つの墓域の前後関係は明らかでないが同時存在の可能性もあり、立地は墓域中心部を占め他のグループよりある程度優位性、先行性が考えられる。CグループはM7の存在で立地的に規制を受け、D・EグループもA・Bグループの規制を受けるよう配置され、後出的な要素をもつ。

円形土塙を除く各土塙は切り合い関係が極めて少ないとから各々の墓の意識の存在する一定時間内に順次つくられていったと考えられ、Bグループの配置の状態などから各土塙間の空間のとり方、標識石の意識等の規制が窺われる。

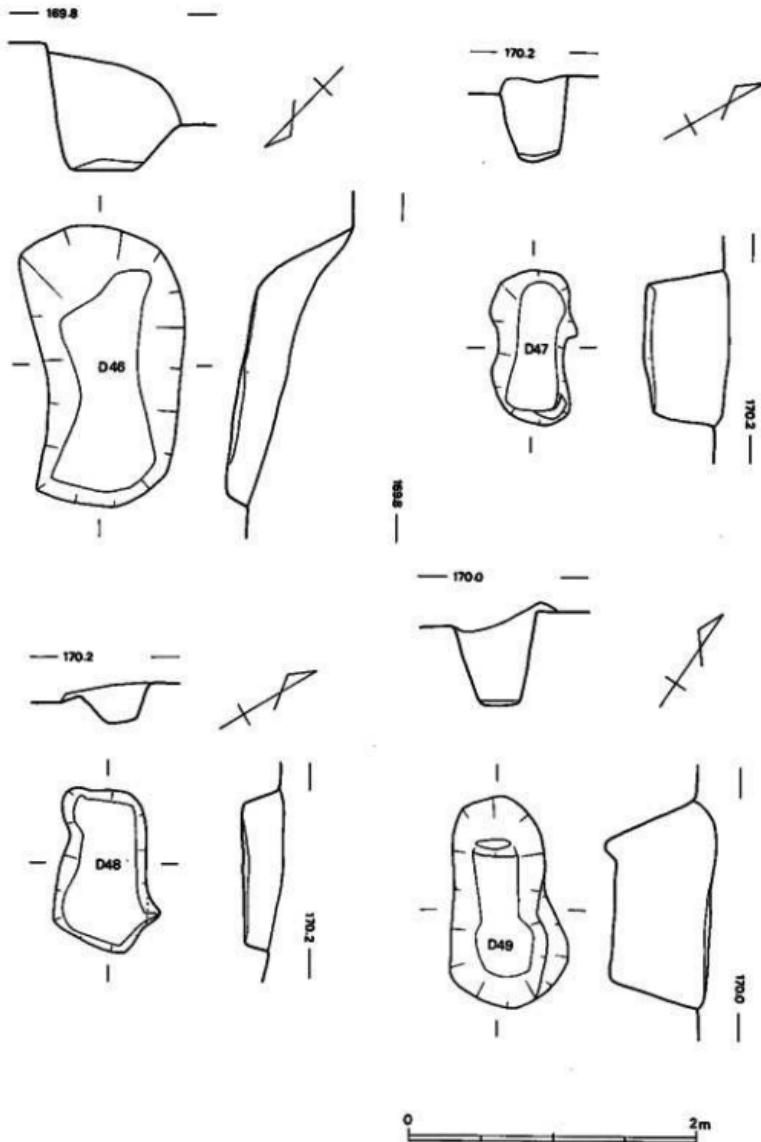
C調査区斜面に位置する2基の箱式石棺は、A・B・C調査区の各墓域の存在を意識し尾根斜面に立地することから土塙墓群形成期より後出的である。また、S3の立地は尾根中央部を占地し、溝のあり方等からS4より先行すると考えられS4はS3を意識したものである。2基の箱式石棺は区画を意味する明瞭な溝を伴ないA調査区のS1・S2とのあり方の相違が認められる。



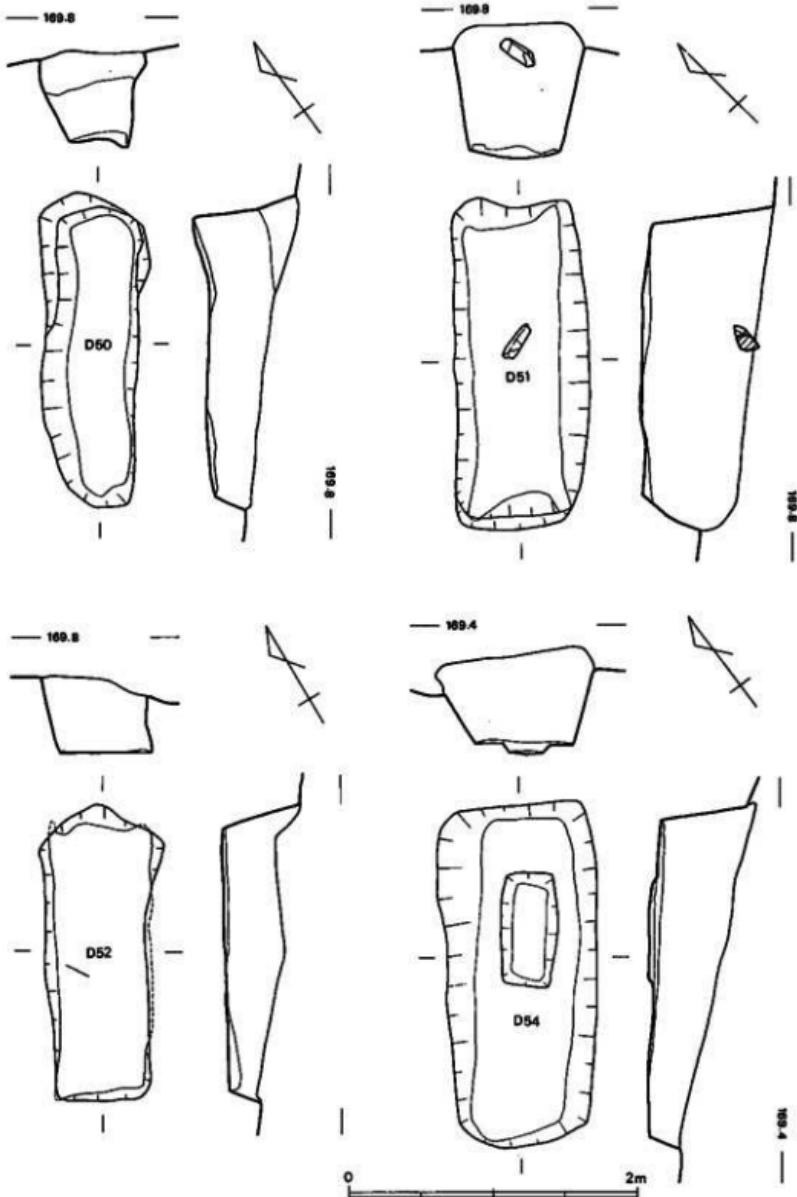
第21図 C調査区D35-38実測図 (1:40)



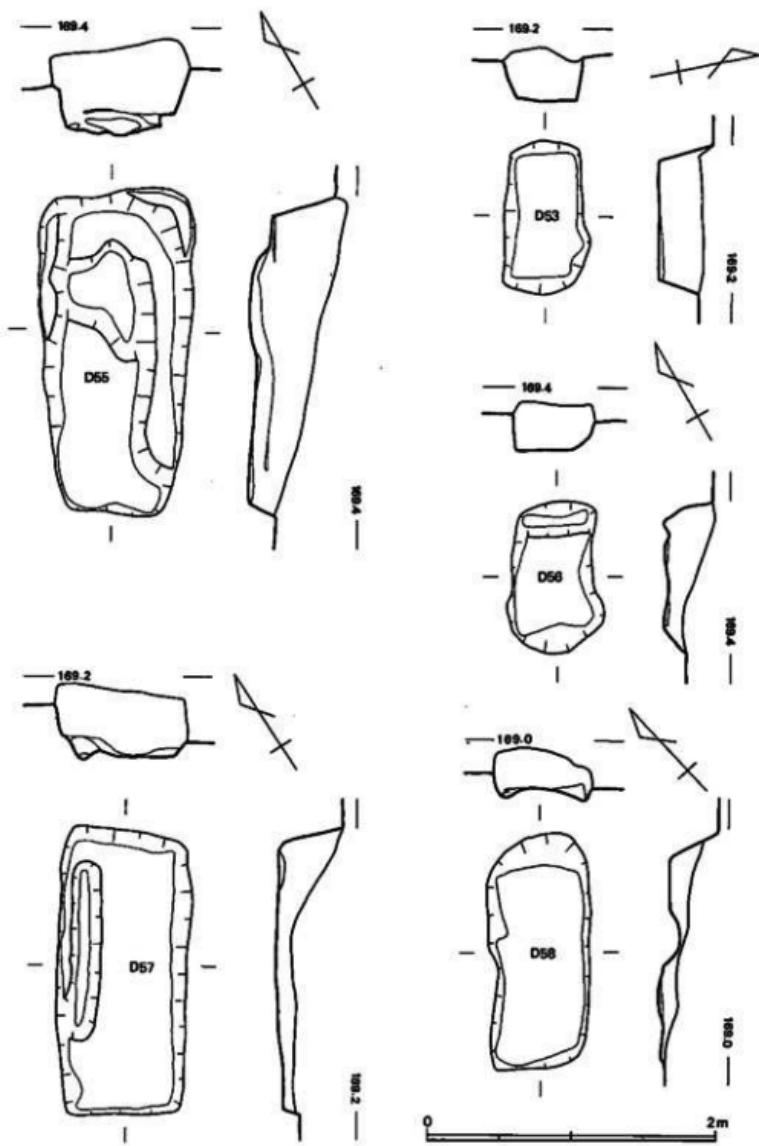
第22図 C調査区 D39~45実測図 (1:40)



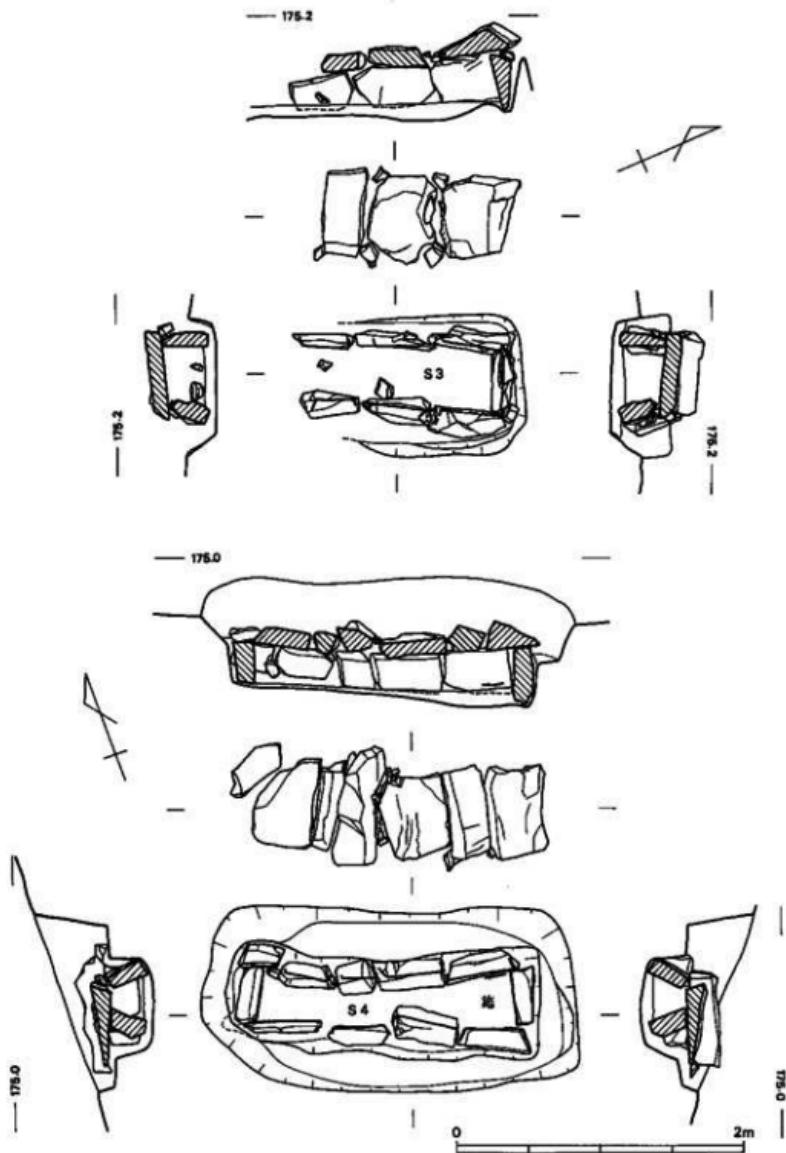
第23図 C調査区 D46~49実測図 (1:40)



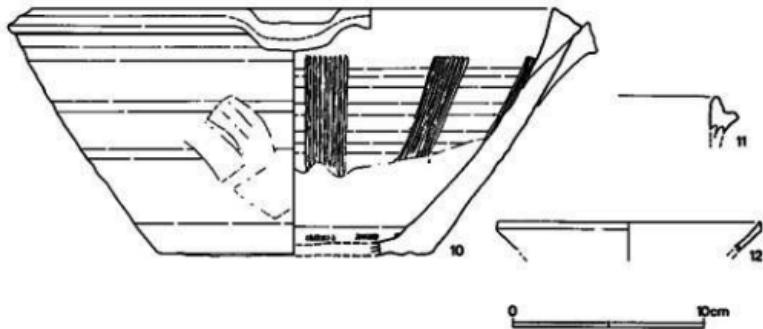
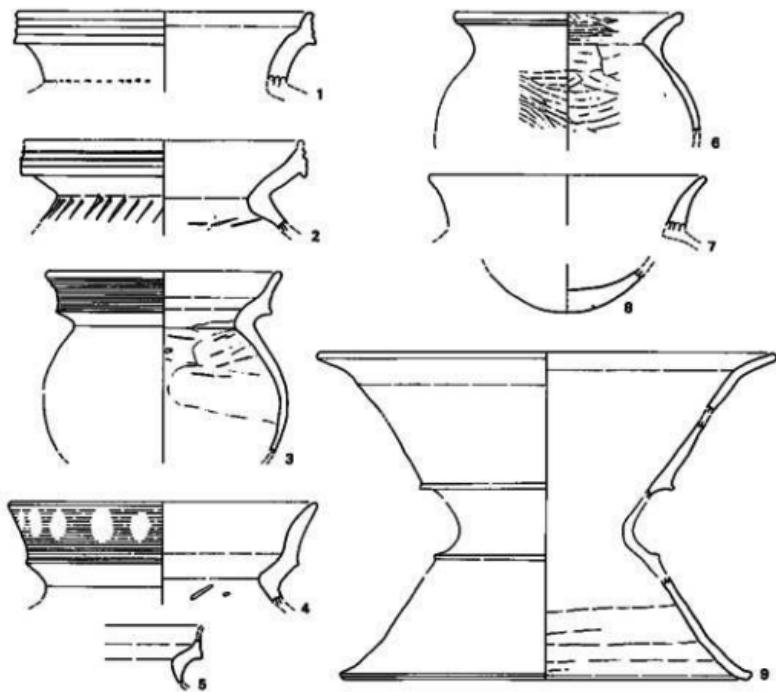
第24图 C调查区D50~52·54实测图 (1:40)



第25図 C調査区D53・55-58実測図(1:40)



第26圖 C調查區 S3・4 實測圖 (1:40)



第27图 各调查区出土土器实测图 (1 : 3)

[A调查区—1·2·4·6~9·11; C调查区—3·5·10·12]

## V まとめ

恵下遺跡は現在、鳥帽子、横原、猪の子、畠等の集落を見下すことができ、非常に眺めがいい場所である。古代人達はこの谷盆地を生活の地とし、稲作を行ない、死者をこの高燥な丘上に葬ったものと思われる。ここでは墳墓の構造・墓域・出土遺物等を要約し、まとめにかえたい。

土塚の掘り方は素掘りで垂直に深く地山を掘込んだものが多い。底面を匂状に掘込んだもの、小口に溝を持つもの、底面中央を掘下げたもの等があり、組み合せ式の木棺墓と考えられる。木棺の組み方は匂状のものを主流として匂状のものもある。また、D34は側板のおさえに小口部に板石を立てて、側板が小口石を挟むタイプのものである。埋土が淡褐色～褐色砂質土の単一層の為、それ以上棺構造・床面施設を明らかにし得なかった。土塚をI類(29基)・II類(4基)・III類(18基)・その他(8基)に分類して考えてみた。I類・III類は多いがII類は極めて少ない傾向にある。I類・II類・III類aは主に成人の伸展葬・屈葬であったと考えられる。I類は墳墓群の中心的存在で主軸を尾根と平行するものが多い。土器を供獻するものや墓標石を伴なうものがあり、一定の葬送儀礼が行なわれたものと思われる。II類には玉類を副葬したものがある。III類は深いもの(a)と浅いもの(b)とがあり、bには小児墓と考えられるものもある。その他の不整円形の土塚は早稲田遺跡の<sup>iii</sup>ような座棺であった可能性もある。

箱式石棺は4基ともよく似ており、石棺の内法は長さ約165cm、幅約40cm、深さ約30cmであり、成人の伸展葬と考えられる。石材は流紋岩、花崗岩等の河原石である。蓋石はやや厚手であるが、比較的大型の良好な石を用いている。しかし、小口石・側石は丈の短いものや断面が三角形を呈するものを用いており、決して良材ではない。これを補う為、墓塚の底面は小口石や側石の形状に合わせて掘り残し、石を置いて棺を組み、更に棺内を5～10cm程度掘下げている。石棺の組み方は匂状のもの2基、匂状のもの1基、匂状のもの1基である。付属施設として溝を伴なわないもの(S2)、小型の弧状の溝を伴なうもの(S1)、大溝を伴なうもの(S3・4)があり、S2→S1→S3・4への一定の流れが考えられる。

土塚・箱式石棺は一定の墓域を形成し、その中に計画的に構築している。各調査区

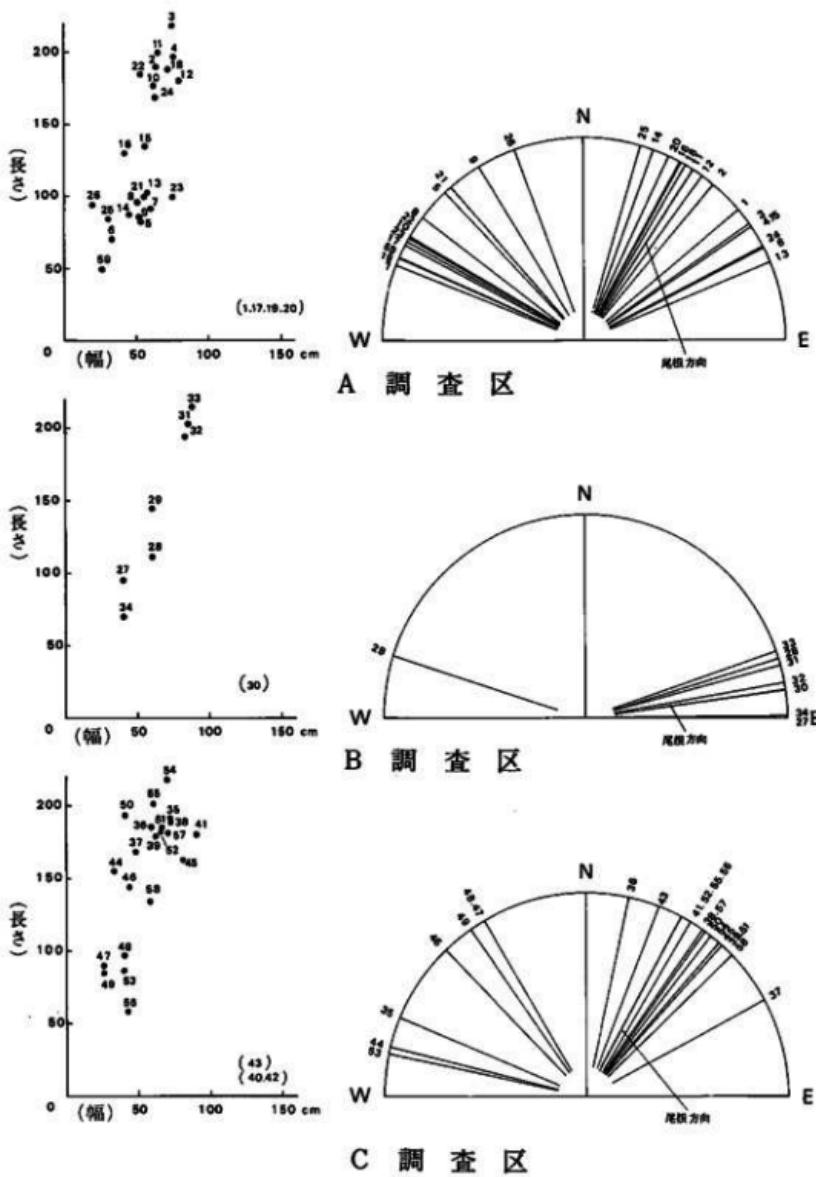
で、それについて検討してきた結果、3つの段階が考えられる。第1段階は共同墓地の段階、第2段階は共同墓地内に区画をもつ墳墓が現われる段階、第3段階は特定個人の墓の段階である。

第1段階はA調査区のA・BグループやB調査区のD31~34やC調査区A・Cグループ・Bグループがある。A調査区のA・Bグループは段状造構を伴なう平坦面にD11・12・18を中心に構成されており、Aグループがやや先行優位にあったものと思われる。B調査区のものは溝状造構を伴なう平坦面に墓標石のあるD32を中心に構成されている。C調査区のA・Cグループは北半を段、南半をM7で区画した平坦面に墓標石のあるD38を中心に構成されており、Cグループはやや後出的である。Bグループは北半をM7で区画した平坦面に墓標石のあるD51を中心に規則正しく並んでいる。いずれの墓域も段か溝を伴なう平坦面上である。これは自然地形上でもやや傾斜な斜面であったものを最小限度削平加工して墓域設定を行なった結果であろう。これら4グループはA調査区を軸とし、相前後した時期に墓域設定、土塙の構築を行なっており、少なくとも4つの集団が存在し、血縁的にも近い関係にあったものと思われる。C調査区のA・Cグループ・Bグループの主軸方向はA調査区のA・Bグループにならって決めたようにも思える。B・C調査区のものは墓標石をもつ土塙があるが、A調査区には全く無いなど一定の差が認められる。しかし、B調査区の数がやや少ないことを除けば、概して各々グループは均質的であり、高燥な地にある共同墓地の典型的な在り方を示すものである。

第2段階はA調査区のC・DグループやC調査区D・Eグループ及びD37がある。A調査区のC・Dグループは第6郭周辺の大型土塙やA・Bグループの周囲のものがある。C調査区のD・Eグループ及びD37はAグループの周囲にあり、D53はBグループの東半にある。A調査区のものはA・Bグループが発展的に墓域の拡張や箱式石棺の採用、溝（個に対する区画）の採用を行なっているものとみられる。C調査区のA・Cグループの後発的なものはD・Eグループ及びD37であり、Bグループの後発的なものはD53しかない。B調査区には後発的なグループがない。このようにこの段階の各グループには明らかな差が認められ、各グループ間の不均等、特定集団の発生を考えられる。

第3段階はS3・4がある。これらは共同墓地より独立しており、また、大きな溝を

第4表 各調査区土塚規模(座面)主軸一覧



もつなど、古墳的様相が強いものである。ここにおいて初めて特定個人の墓が誕生するが、基盤が弱くまだ絶大なる力を持ち得ない為、A調査区とC調査区の間という立地的には決してよくない斜面を選び、箱式石棺を造ったものと思われる。D26~30・40・42・46はその立地・平面プラン等より第3段階より新しい段階のものかと思われる。

墳墓に関連する遺物として土器・玉類・鉄器がある。土器には瓈形土器・鼓形器台があり、弥生時代後期～古墳時代前期と思われるが、以下それについて概略を述べる。(1)・(2)はくりあげ口縁に3条程度の凹線をもち、体部内面にはヘラ削り、肩部外面にはヘラ状工具による斜行刺突がめぐらされている。弥生時代後期でも古い様相をもつと思われ、細追遺跡出土土器に類例が求められる。(3)は短く、くの字に外反した頸部から屈折し口縁部が外反気味に広がる。口縁部には多条の沈線が施され、体部内面は頗著なヘラ削りがなされている。弥生時代後期でも新しい様相を示している。九重遺跡3号土塙出土土器と比べると、口縁部の器壁がうすく、やや外反が強く、肩部の刺突もなく、やや新しい傾向があるものと思われる。(4)・(8)は複合口縁に沈線を施し、部分的に消しており、丸底である。(9)は器高が縮まったタイプで、外面はナデ、内面はヘラナデによって調整されており、器壁はうすい。(4)・(8)・(9)はほぼ鍵尾II式にあたるものと思われる。(6)・(7)は単純口縁で体部内面はヘラ削り、その他はヘラ磨き等によって丁寧に調整している。これらは(4)・(8)・(9)とほぼ同時期の可能性が強い。(5)は二重口縁で、ナデによって調整されている。(4)・(8)よりやや後出的であろう。遺構に伴なう土器は(3)・(6)だけである。(3)はB調査区のD52直上、(6)はA調査区D9あるいは10の直上にあった。(6)はD9とD10の境にあった為、どちらとも決し難いが、DグループのD9が新しいとすれば、D9に伴なうかもしれない。他の土器は墳墓群よりやや下った斜面より出土しており、いずれも墓塙直上に供獻されていたのだろう。特に、(4)・(8)・(9)はD5より1m西下方で一括出土しており、D5との関連が考えられる。

玉類には勾玉・管玉・ガラス小玉がある。管玉はいずれも長さ1.74～0.99cm、径0.44～0.32cmの小型細身のものである。宮の前遺跡や朝田墳墓群の報告で弥生時代の碧玉製管玉について触れられている。ほぼ弥生時代のものは、古墳時代のものより小型で、長さ0.3～2.0cm、径0.3cm程度のものが主流とされている。本遺跡の管玉は凝

灰質細粒砂岩製と青めのう製であるが、すべてこの数値に近いもので、弥生時代の所産である可能性が高い。ガラス小玉は中央に棱をもちソロバン玉状を呈しており、技術的に特異性が考えられる。

鉈は県内で26遺跡より出土が知られている。本遺跡の鉈の特徴は刃部が小形の刀子状で、茎部が途中より角棒状で先端は尖っておわっており、裏すきがないなどである。古瀬清秀氏の分類によれば、II類bに近いタイプであろう。

以上、遺物について述べてきた。遺構のわりに遺物が少なく、年代を決定するのが困難であるが、ほば、第1段階を弥生時代後期、第2・3段階を古墳時代前期と考えてみた。

太田川流域におけるこの時代の墳墓群として西願寺遺跡<sup>59</sup>が上げられる。この遺跡でも3つの段階が認められている。第1段階はA地点の土塙群で弥生時代の共同墓地的な在り方を示す。第2段階はC地点で、石を被覆することによって区画した土塙及び竪穴式石室を含む墳墓群である。第3段階はD地点等のもので、竪穴式石室を内部構造とし、貼石や積石によって墓域を区画しており、四隅突出型ともいえるものを含む。弥生時代～古墳時代前期の墳墓群と推定されている。本遺跡と同様な在り方を示すが竪穴式石室の採用、貼石・積石の墳丘、鐵器の豊富な副葬等、より一層の権力者の誕生を思わせる。しかし、定型化した古墳になっていない点、太田川流域における古墳文化受容の一端を窺わせるものと思われる。

## 註

- (1) 潮見浩「広島市牛田早稲田山遺跡の発掘調査報告」「広島考古研究」2 1960
- (2) 藤田等「広島県安佐郡佐東町細田追跡調査概報」「広島考古研究」1 1959  
福谷昭二「広島県安佐郡佐東町細田遺跡・追跡調査概報」佐東町教育委員会 1968
- (3) 東森市良「九重式土器について」「考古学雑誌」第57巻第1号 1971  
東森市良・前島己基・松本岩雄「弥生式土器集成」「八雲立つ風土記の丘研究紀要」1977
- (4) 山本清「山陰の土師器」「山陰文化研究紀要」第6号 1965  
前島己基・松本岩雄「鳥取県神原神社古墳出土の土器」「考古学雑誌」第62巻第3号 1976
- (5) 宮の前遺跡発掘調査団「宮の前遺跡」A～D地点 1971
- (6) 山口県教育委員会「朝田墳墓群」山口県埋蔵文化財調査報告書第37集 1978
- (7) 古瀬清秀「古墳出土の鉈の形態的変遷とその役割」「考古論集」1977
- (8) 広島県教育委員会「西願寺遺跡群」1974

## 第5表 広島県内鉄出土地名表

名 称	所 在 地	墳形	主体構造	出土数	供 伴 遺 物	備 考	文 献
1 西小丸3号墳	比婆郡東城町三坂西小丸	円	横式石棺	3	鐵刀2、鐵劍1、須恵器		①
2 大坂第1号古墳	比婆郡東城町三坂	円	横穴式石室	1	鐵劍1、鐵劍18、鐵刀子6、鐵盤1、勾玉、管玉、切子玉、ガラス玉、須恵器	現長13.0cm	原
3 大原1号遺跡 1号住居跡	庄原市本村町吉備谷			1	弥生式土器(中期後半)	住居跡 長6.5cm	② ⑦
4 淨業寺12号墳	三次市高杉町	円	粘土 墓		円筒埴輪、鐵劍、鐵刀子		③ ④ ⑦
5 太郎丸古墳	三次市島敷町	円	豎穴式石室	2	鐵刀1、鐵劍2、刀子1、鐵劍38、不明鉄製品1、珠文鏡、ガラス玉	現長5cm	④ ⑤ ⑦
6 善法寺8号墳	三次市西酒屋町	前方後圓	豎穴式石室	1	珠文鏡、鐵狀1、銀先		④ ⑤ ⑦
7 善法寺9号墳	三次市西酒屋町	前方後圓	土 墓	1	鐵劍1、鐵刀1、鐵劍3、鐵矛1、		④ ⑤ ⑦
8 四捨貢日南39号墳	三次市四捨貢町	円	土 墓	1	鐵劍1、鐵劍12以上、土師器		④
9 勇免5号墳	三次市大田幸町	円	横式石棺	3	鐵刀子3、鐵劍7、碧玉製管玉7、水晶製勾玉1、水晶製ソロバン玉2、鐵津		④
10 松ヶ迫矢谷 MD-1号墓	三次市西酒屋町	前方後圓	横式石棺	1	不明鉄製品	現長9.9cm 2本出土か?	④
11 内水越1号古墳	福山市津之郷内水越		横式石棺	2	鐵劍、鐵鏡、鐵矛、鐵刀子	現長8.5cm 内水越には加羅の鐵劍1件と傳承	④ ⑤
12 石鎚山1号墳	福山市加茂町上加茂	円	第1主体 豎穴式石室	2	鐵刀子、吾作鶴二神二級鏡、勾玉5、管玉41	長23.5cm	⑪
13 石鎚山2号墳	福山市加茂町上加茂	円	第1主体 土 墓	1	鐵刀子、内行花文鏡 (破鏡)	長12.3cm	
14 手坊谷2号墳	福山市駄家町中島	円	横式石棺	1	鐵刀子、円筒埴輪、形象埴輪、須恵器(有蓋高杯)	長15.8cm	⑪
15 今岡所在の古墳	福山市駄家町今岡	円	横式石棺		珠文鏡、鐵劍、鐵刀子		⑪
16 寺山1号墳	府中市栗原町大字豊呂茂	円	横式石棺	1	鐵劍1、鐵劍2、珠文鏡、土師器		⑪
17 宮の谷1号墳	三原市沼田東町納所字宮の谷	円	横式石棺	2	鐵刀子、勾玉1、ガラス玉10、武鑑1、鐵劍1、鐵矛1	長16.5cm	② ④
18 宮の谷4号墳	三原市沼田東町納所字宮の谷	円	木 桁(A)	1	須恵器(環状鏡、銀瓶1)、銀鏡10、銀片1、鉢形1、刀子1、馬具1、		② ④
19 原造11号墳	広島市可部町原造	円	横穴式石室	1	丸玉1、鐵刀1、鐵劍6、鐵刀2、馬具、須恵器	長11.2cm	② ④ ⑦
20 上ヶ原D-3号墳	広島市可部町上ヶ原	円	横穴式石室	1	須恵器、鐵刀子4、鐵劍13、金環2		② ④
21 空長2号墳	広島市紙園町大字西山	円	横式石棺	1	直刀、鐵劍2、鐵刀子3、鐵劍	長12.0cm	⑪
22 真亀1号墳	広島市高陽町真亀	円	粘土 墓	1	鐵鏡、鐵刀子、鐵刀	長21.2cm	⑪
23 西願寺D-2号墳	広島市高陽町矢口		豎穴式石室	2	鐵劍1、鐵刀子2、鐵矛3	長18.7cm 現長16cm	② ④ ⑦
24 中矢口遺跡	広島市高陽町中矢口			1		住居跡埋土 中9.5cm	②
25 西山貝塚	広島市戸坂町			1	磨製石斧、石錐、砾石、骨角器、鐵鏡、圓平片刀鐵矛、棒状銅器、巴型銅器、三棱形骨鏡、圓筒土製品	貝 塚	②
26 恵下遺跡	広島市安佐町原室		横式石棺	1		現長14.7cm	本 報 告

## 広島県内鉱出土地名表文献

- ① 広島県教育委員会『広島県埋蔵文化財包蔵地地名表』広島県文化財資料シリーズ第三  
1961
  - ② 広島県教育委員会『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(1)』 1978
  - ③ 松崎寿和・潮見浩『三次市常楽寺古墳群発掘調査概報』広島大学文学部紀要 6号 1954
  - ④ 広島県双三郡・三次市史料総覧編修委員会編『広島県双三郡・三次市史料総覧』第五篇  
1974
  - ⑤ 本村豪章『備後三次市太郎丸古墳発掘調査報告』古代吉備 4集 1961
  - ⑥ 松崎寿和『三次市天狗松・善法寺および宗祐西古墳群発掘調査略報』 1963
  - ⑦ 松崎寿和『広島県史(考古編)』広島県 1979
  - ⑧ 加藤光臣『広島県三次市松ヶ迫矢谷古墳群の調査』考古学ジャーナルNo.151 1978
  - ⑨ 村上正名『備後芦田川流域の古墳群』古代吉備 3集 1959
  - ⑩ 福山市史編集会『福山史』上巻 1963
  - ⑪ 広島県教育委員会、(財)広島県埋蔵文化財調査センター『石鍔山・吹越古墳群現地説明  
会資料』 1980
  - ⑫ 広島県教育委員会『県営駅家住宅団地造成地内埋蔵文化財発掘調査報告』 1976
  - ⑬ 脇坂光彦『府中市中須町大字寺迫字御旅出土の鏡』芸備三集 1975
  - ⑭ 寺山遺跡発掘調査団『寺山遺跡発掘調査報告』 1979
  - ⑮ 福井万千『三原市史考古編』三原市 1977
  - ⑯ 県立可部高等学校史学研究部『広島県安佐郡可部町原追11号墳発掘調査報告』はにわ7号  
1968
  - ⑰ 福谷昭二『可部町史(第二章)歴史のあけぼの』 1976
  - ⑱ 広島市教育委員会『空長古墳群発掘調査報告書』広島市の文化財第13集 1978
  - ⑲ 広島県教育委員会『高陽新住宅街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 1978
  - ⑳ 河瀬正則『高陽町史(第1章)』広島市役所 1979
  - ㉑ 広島県教育委員会『西願寺遺跡群』 1974
  - ㉒ 広島市教育委員会『中矢口遺跡発掘調査報告書』広島市の文化財第15集 1980
  - ㉓ 藤田等『巴型銅器を出土した西山貝塚調査概要』日本考古学協会昭和40年度大会発表要旨  
1965
- \* 広島大学考古学研究室の御教示による。
- \* この他に福山市加茂町吹越古墳群で10数本が出土している。



a. 恵下遺跡遠景（南より）



b. 同上（西より）



a. A調査区全景発掘開始時（北東より）



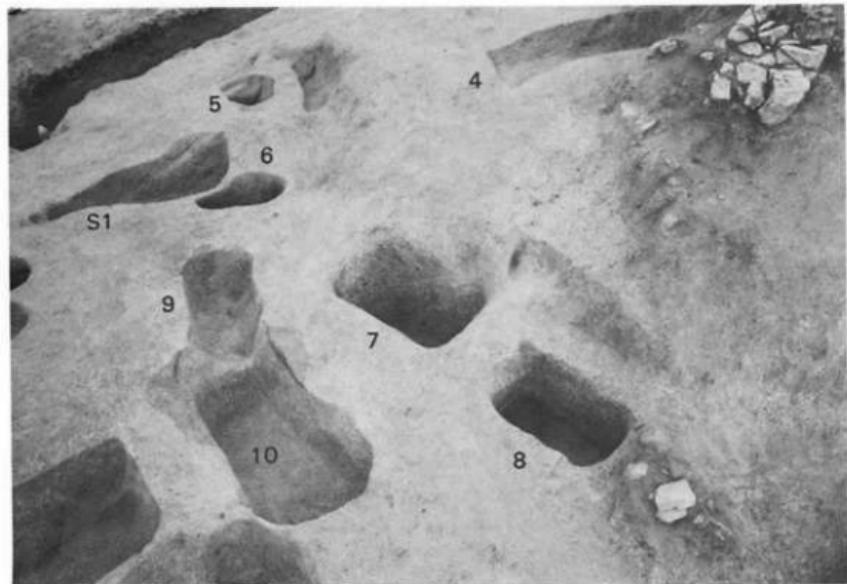
b. 同 上 完掘後（北東より）



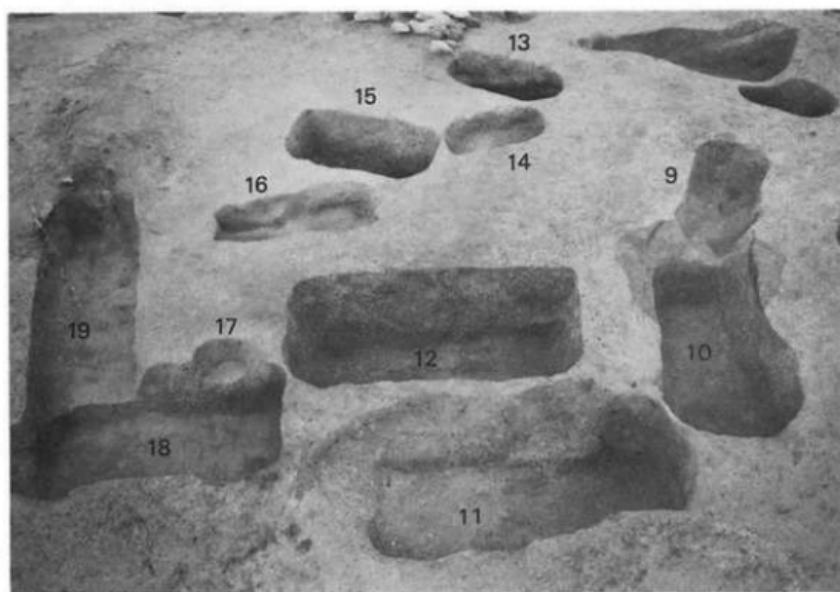
a. A調査区全景完掘後（南西より）



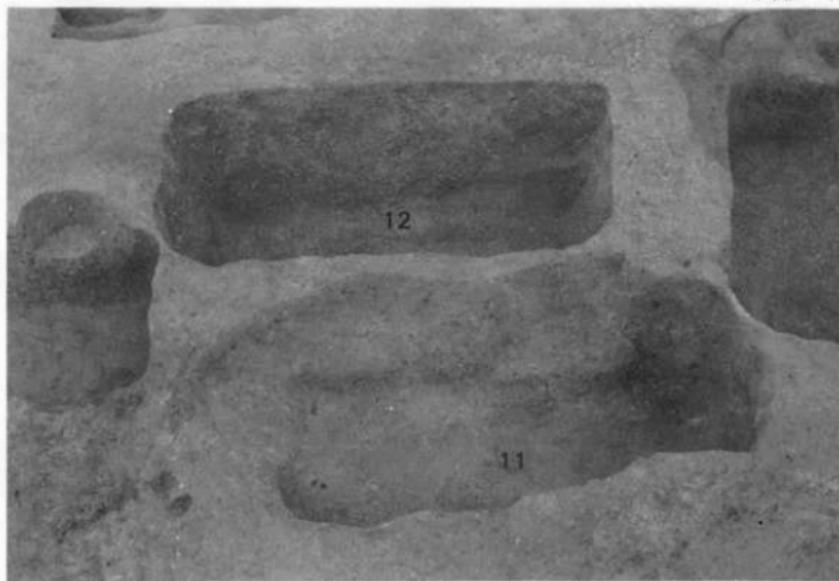
b. 同上 D 1~4, 第6郭土塁（南より）



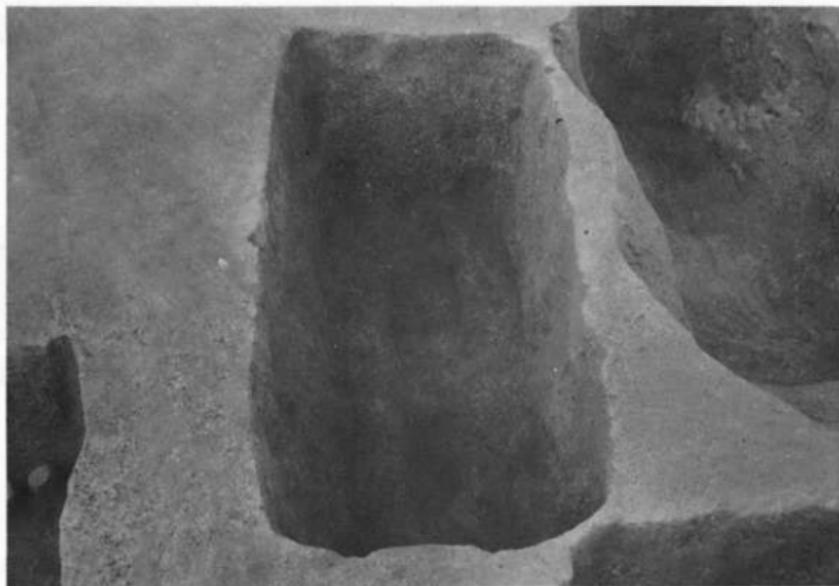
a. A 調査区 D5~10, S1 (南より)



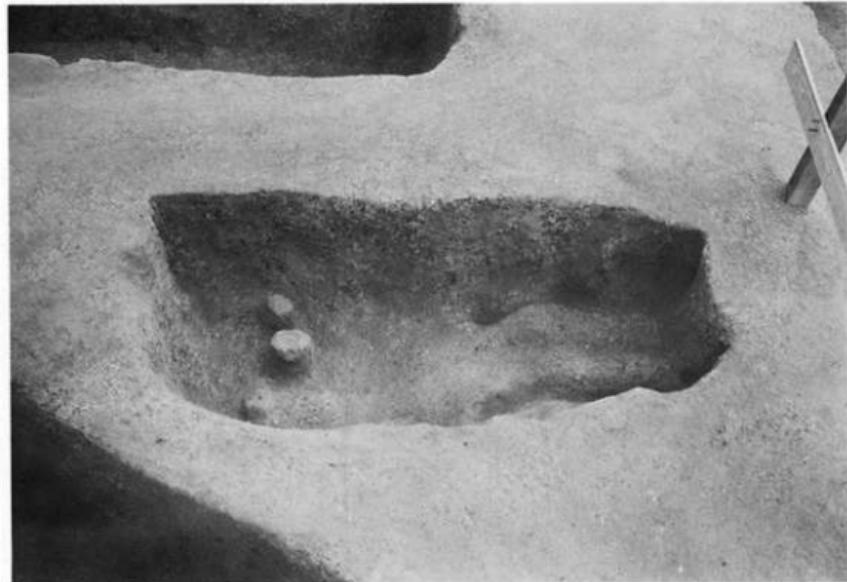
b. 同 上 D9~19 (南東より)



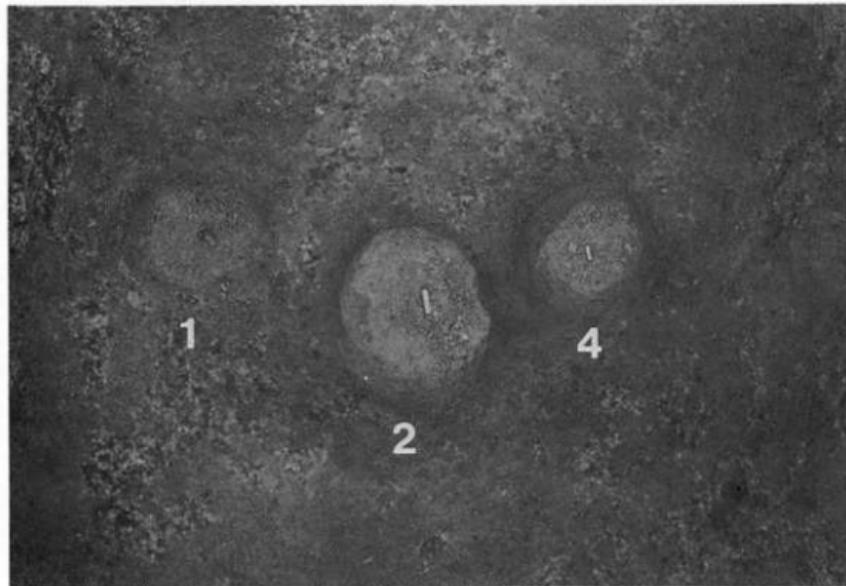
a. A調査区 D11・12 (南東より)



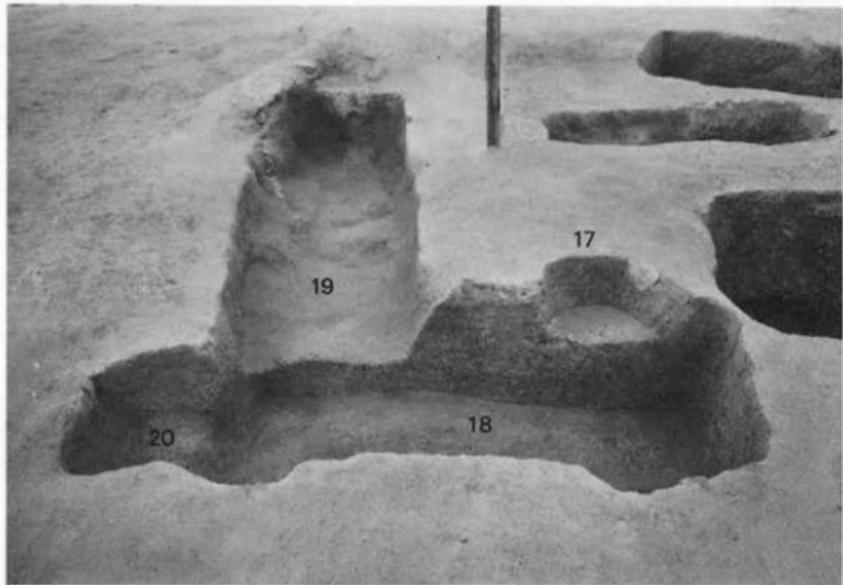
b. 同 上 D12 (南西より)



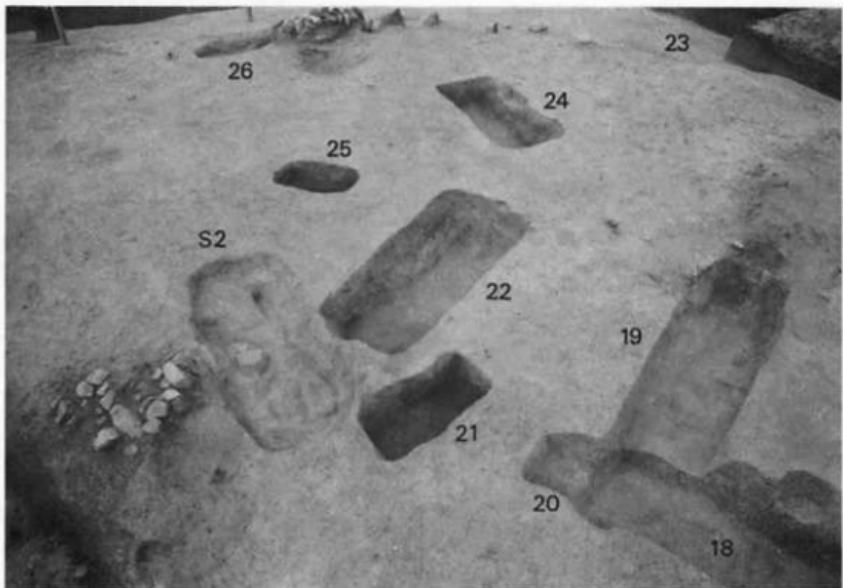
a. A調査区D16（北西より）



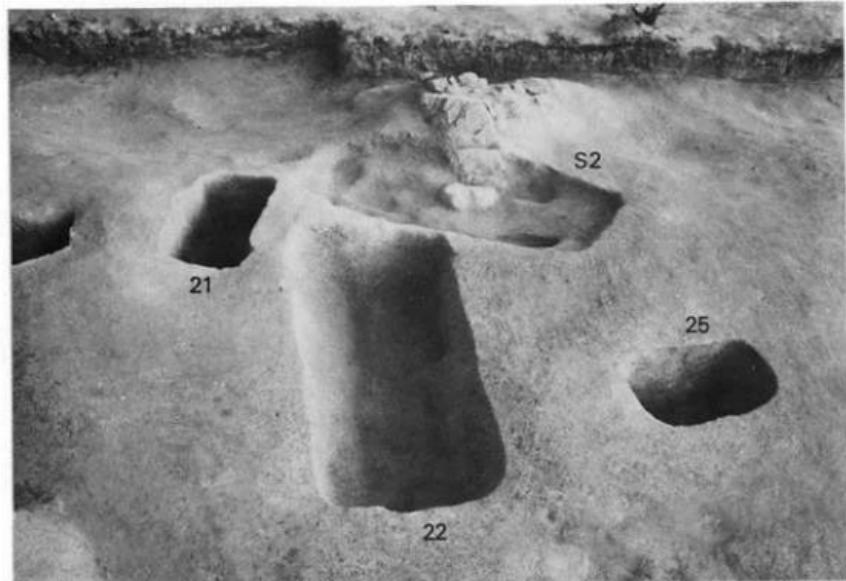
b. 同 上 玉類出土状況（南西より）



a. A調査区 D 17~20 (南東より)



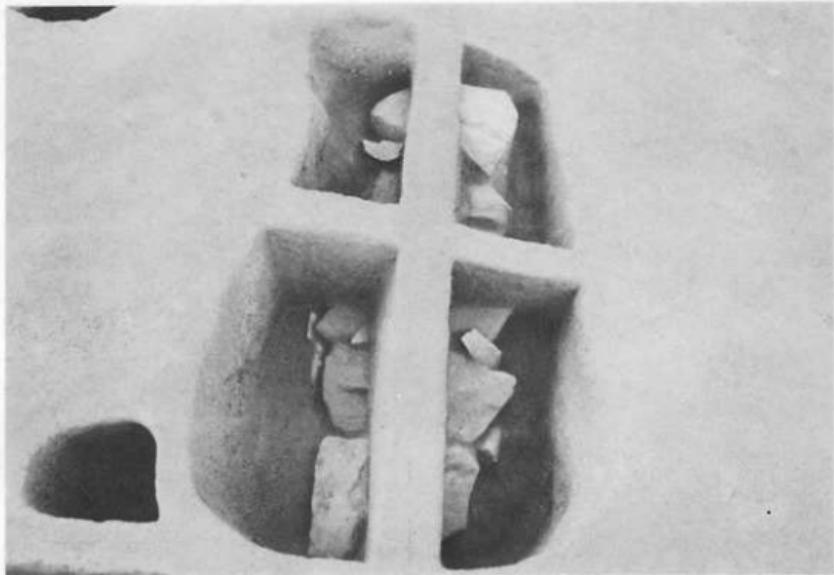
b. 同 上 D 19~26, S 2 (東より)



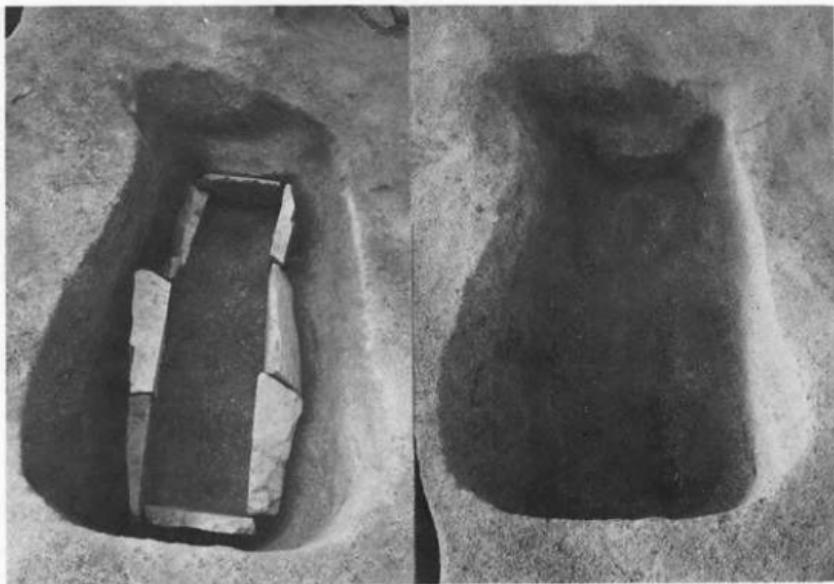
a. A 調査区 D 21・22・25, S 1 (北西より)



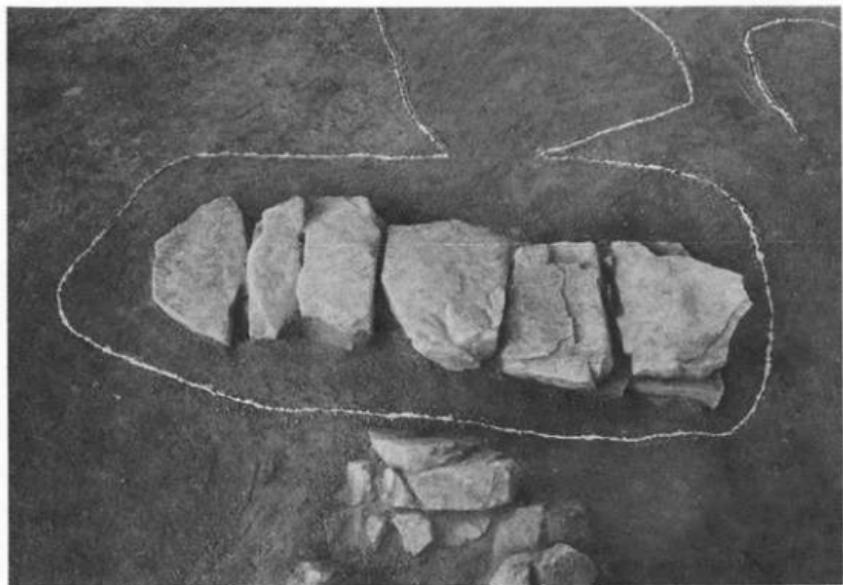
b. 同 上 D 22 (北西より)・24 (西より)



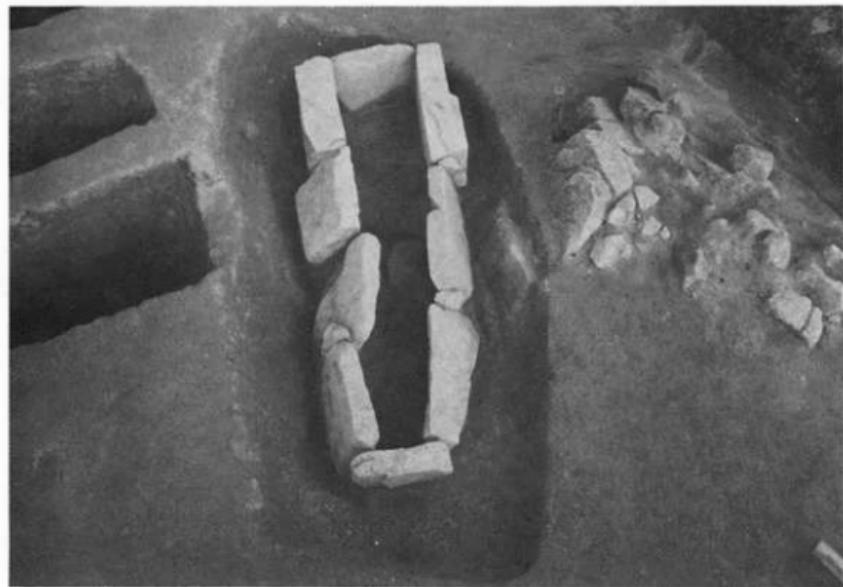
a. A調査区S1(東より)



b. 同上 (東より)



a. A調査区S2(南より)



b. 同上(西より)



a. B調査区発掘開始前（東より）



b. 同 上 完掘後（東より）



a. B調査区D27・28(北より)



b. 同上 M3, D30~34検出状態(南より)



a. B調査区 D31~34 (西より)



b. 同 上 M3, D30~34 (西より)



a. B調査区 D31・32 (南より)



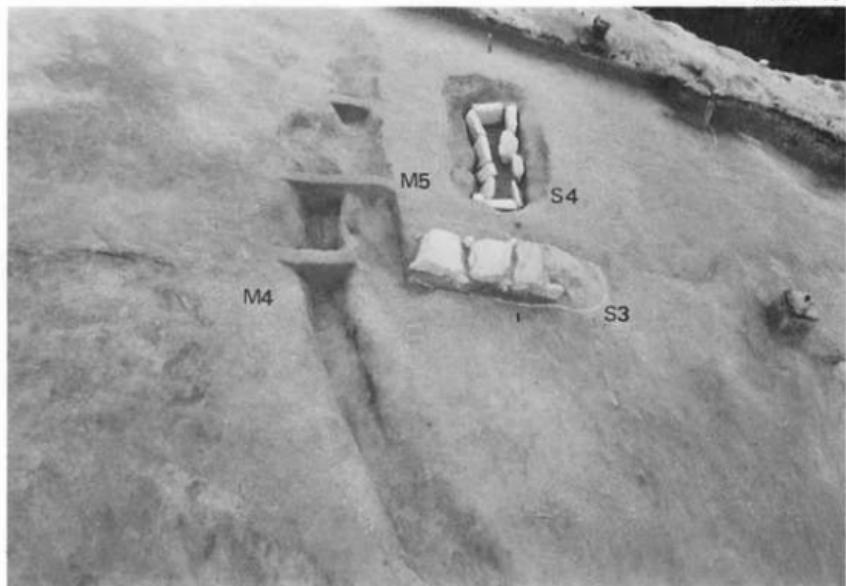
b. 同 上 D34 (北より)



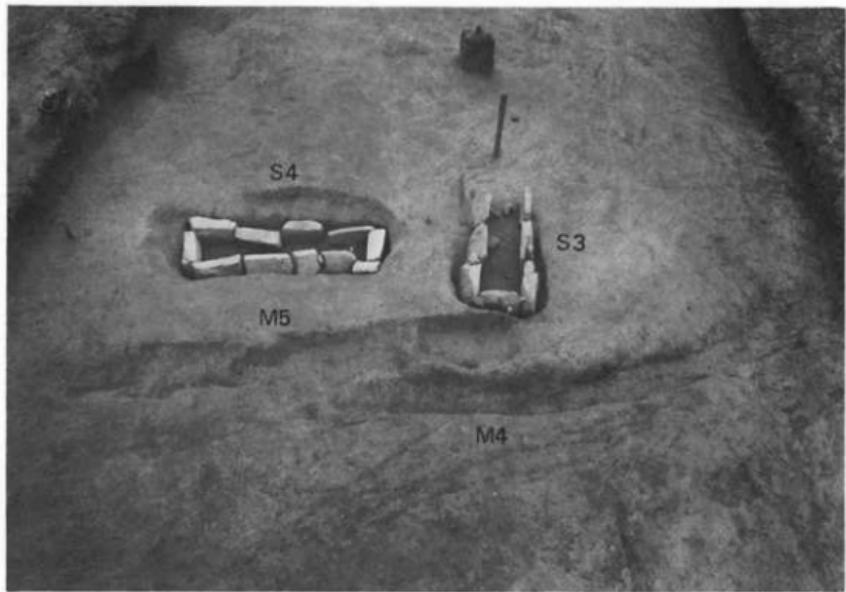
a. C調査区発掘開始前（北より）



b. 同 上 遺構検出状態（北より）



a. C調査区M4・5, S3・4(西より)



b. 同上 (北より)



a. C調査区 S3 (東より)



b. 同上 (南より)



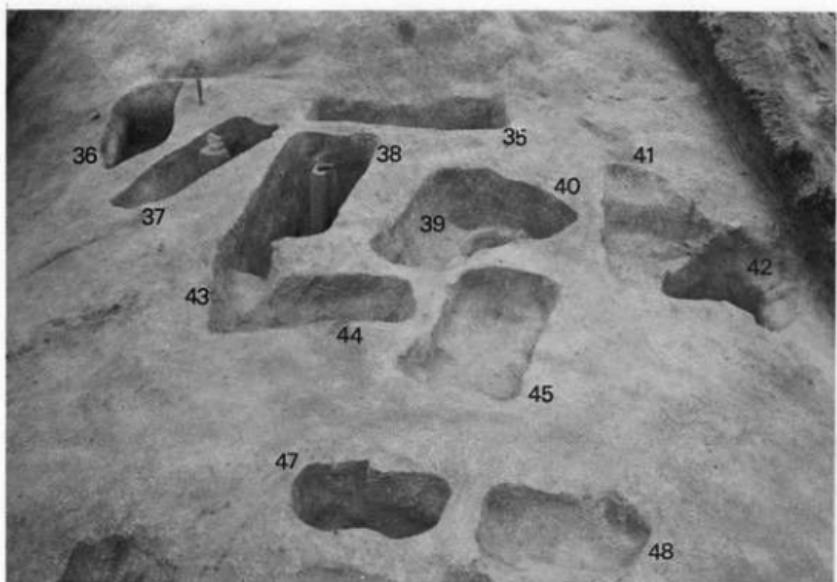
a. C調査区 S4 (南より)



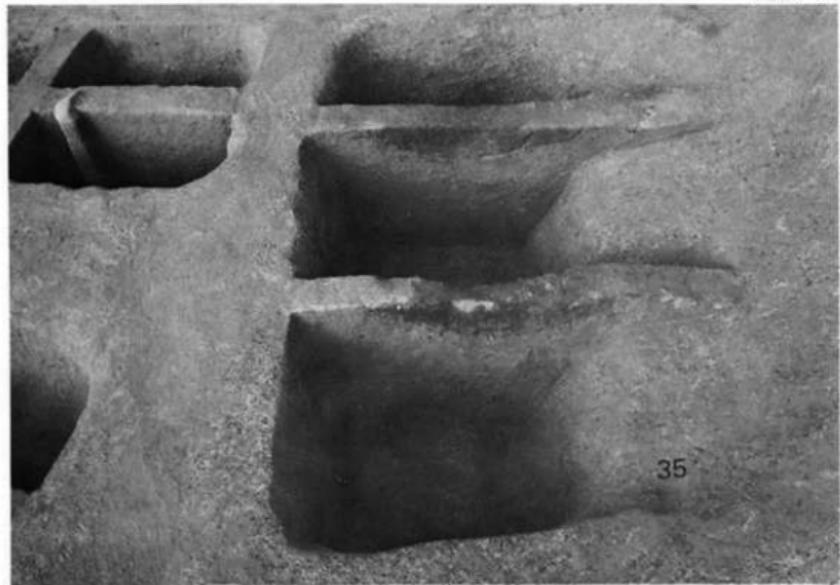
b. 同 上 (西より) 及び甕出土状況 (南より)



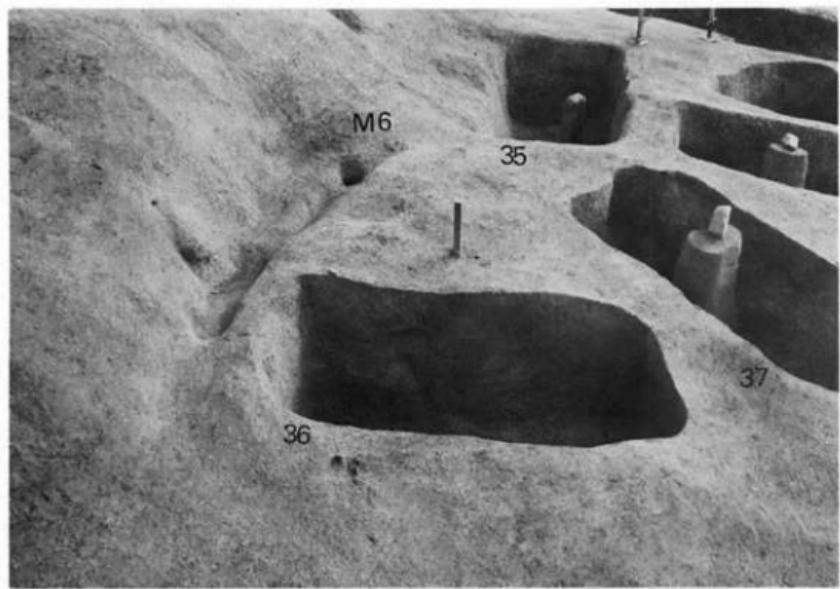
a. C 調査区 D 35~58 (南より)



b. 同 上 D 35~45・47・48 (南より)



a. C 調査区 D 35 検出状態 (東より)



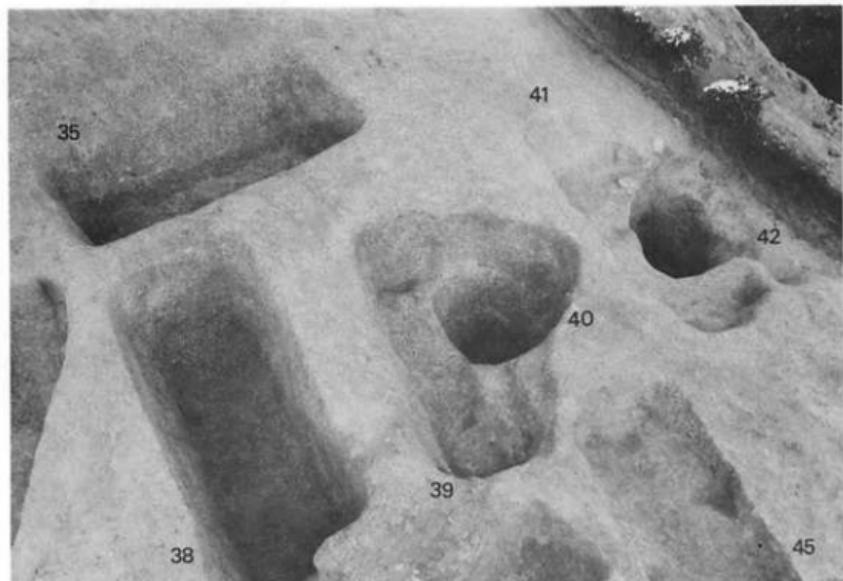
b. 同 上 M6, D 35~37 (西より)



a. C調査区 D 35~39 (東より)



b. 同上 D 38 (北より)



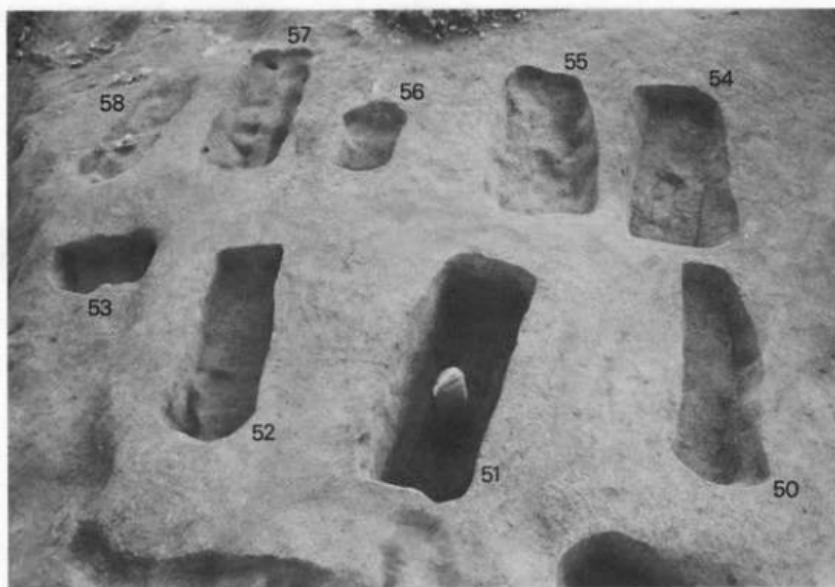
a . C 調査区 D 35・38~42 (南より)



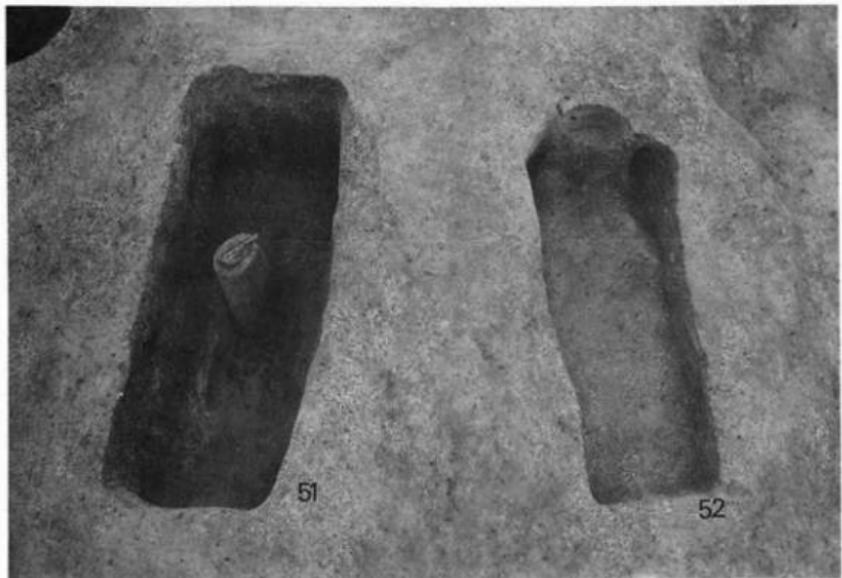
b . 同 上 D 41・42 (北より)



a. C 調査区 M7, D 46~58 (西より)



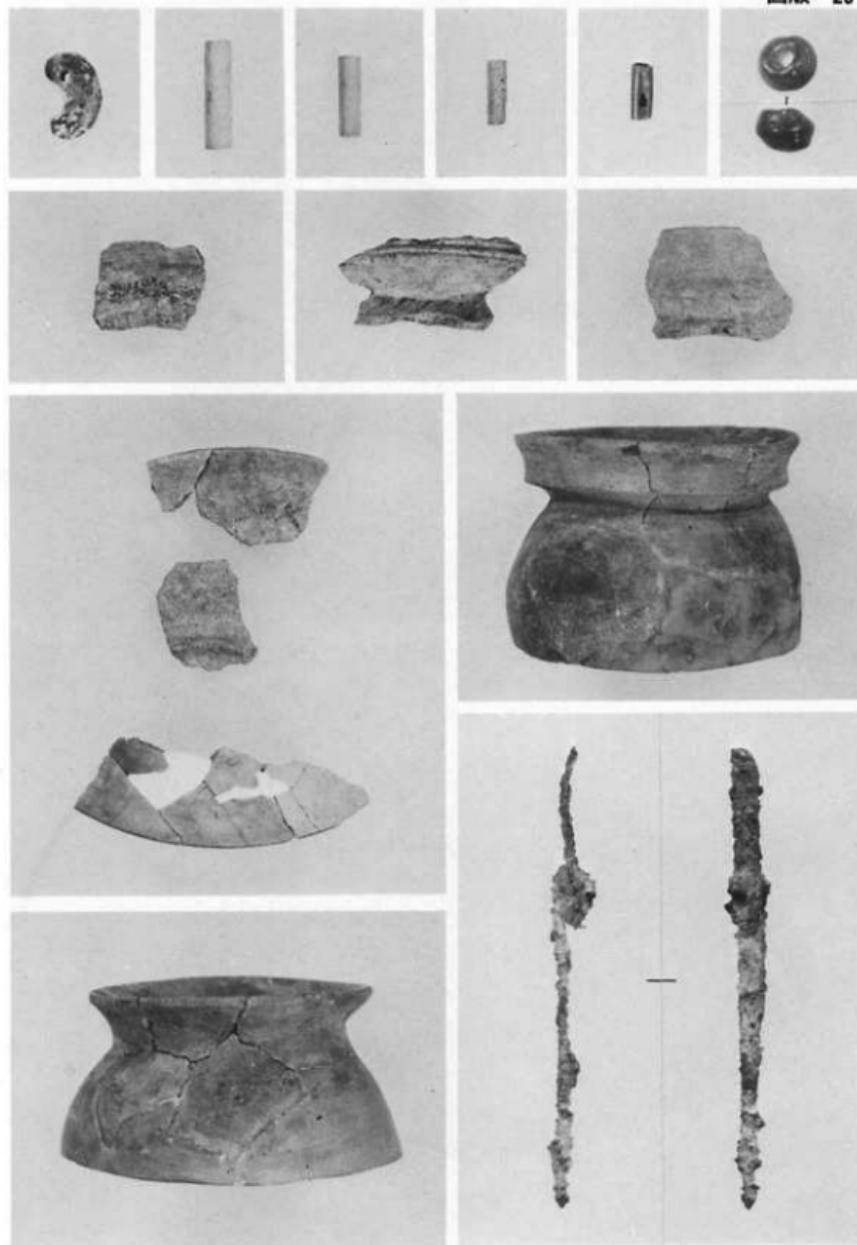
b. 同 上 D 50~58 (北より)



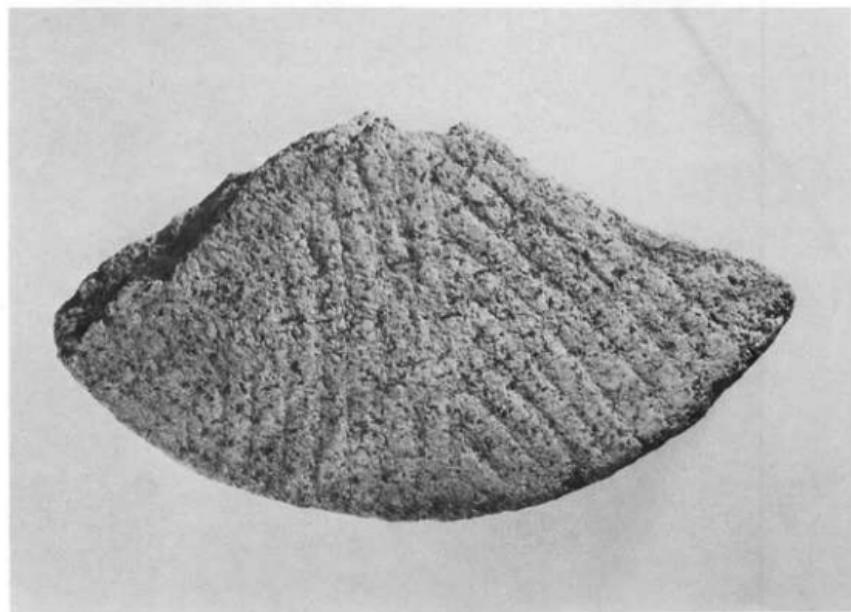
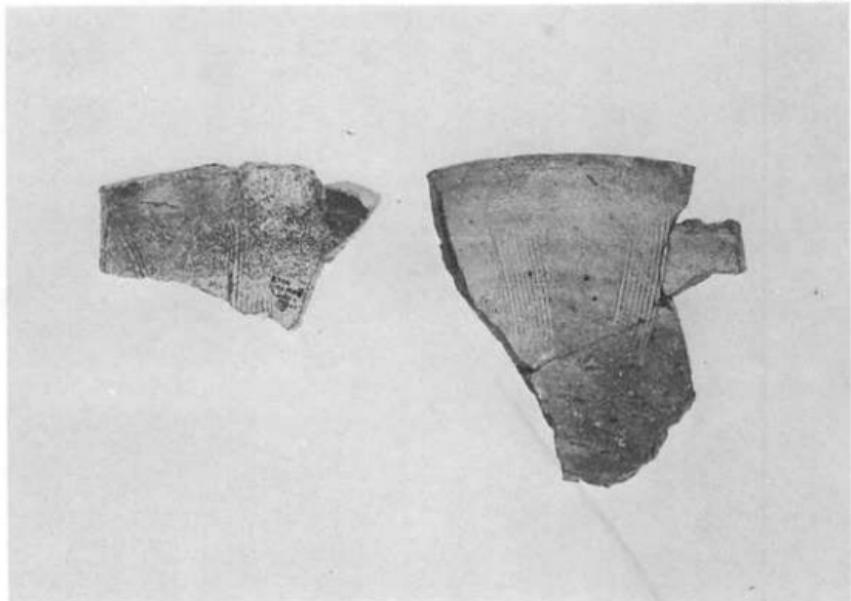
a. C調査区 D51・52（南より）



b. 発掘風景



出土遺物 (1)



出土遺物 (2)

昭和55年3月

## 恵下遺跡発掘調査概報

編 集 (財)広島県埋蔵文化財調査センター  
発 行 広島県教育委員会  
印 刷 (財)広島県埋蔵文化財調査センター  
文化印刷株式会社